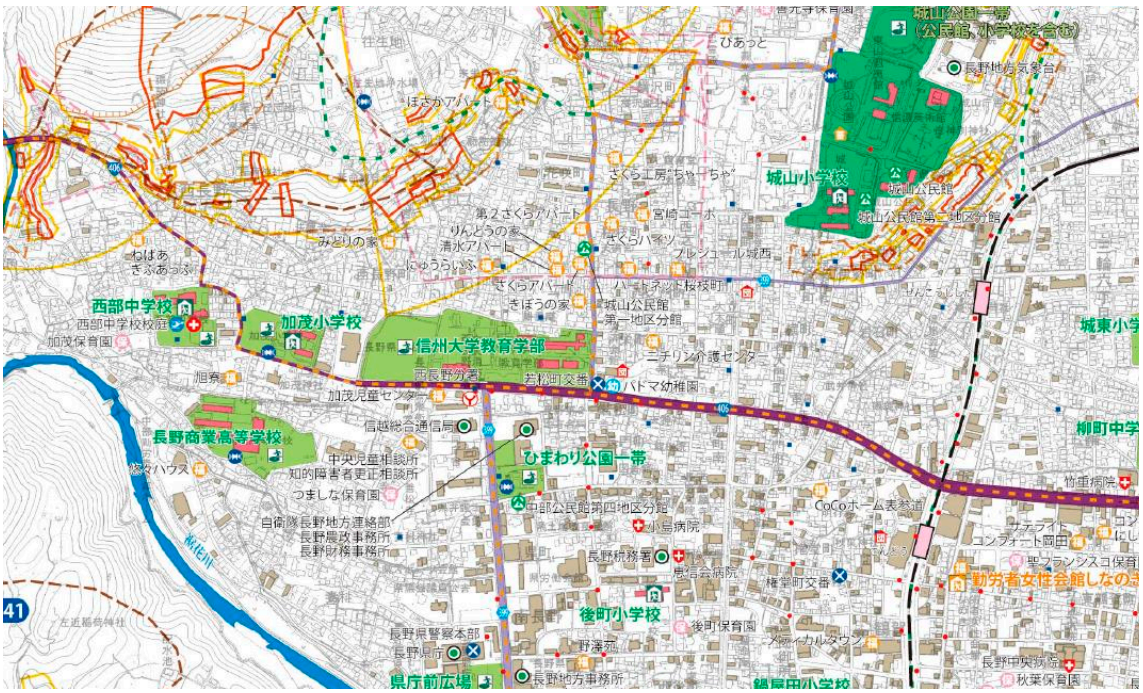
令和５年度長野市立加茂小学校「社会科・総合的な学習の時間」活動報告

長野市立加茂小学校

１　はじめに

長野市立加茂小学校は、県都長野市の西部に位置し、善光寺の近くにある。学区は、長野市を代表する裾花川の近くにあり、幼稚園から大学まで、多くの学校が位置する長野市の文教地区となっている。また、茂菅や小田切のような山間地もあり、変化に富んだ広い学区から、約 200 名の児童が通学している。

長野市のハザードマップを見ると、本校の学区内には何箇所ものがけ崩れや地すべりの警戒区域が確認できる。子どもたちは、もし災害が起きた時には、身の安全を守らなければならない環境で生活している。本実践は、そのような地域に住む子どもたちが、防災を身近なことと感じ、自らの生活している地域を防災の視点から見つめ直すことをねらいとしたものである。



２　学習の導入

防災の学習は、４学年社会科の単元「自然災害からくらしを守る」と総合的な学習の時間を教科横断的に実施した。

学習の導入として、副読本の『のびゆく郷土』や長野県のHPを活用し、長野県内で過去に起きた地震や水害について調べた。調べ学習を通して子どもたちは、長野は過去に多くの災害に見舞われてきたことを知る。さらに、「“猪（しし）の満水”（令和元年東日本台風）災害デジタルアーカイブ」のHPを活用し、令和元年東日本台風の様子や被害について調べていった。HP には当時の写真やインタビュー映像があり、自分たちの身近で起きた災害について調べるうちに、子どもたちは、いつ起きるか分からない災害をより身近に感じていった。

3　防災学習の内容

(1) 10月16日　自分たちが住む長野県では、過去にどのような災害が起きたのかを調べた。

（『のびゆく郷土』、長野県 HP、「“猪（しし）の満水”（令和元年東日本台風）災害デジタルアーカイブ」HPの活用）

【子どもたちの気づき】

・昔に善光寺のあたりで地震があったことが分かった。
・長野県内ではたくさんの災害が起こっているんだな。
・長野市でも大雨で洪水の被害が出たことを聞いたことがある。

(2) 10月23日　地震や水害が起きた時に、自分たちの生活はどうなっていくのかについて考えた。

【子どもたちの気づき】

・家が壊れてしまうかもしれない。
・学校が避難場所になると聞いたことがある。
・食べるものはどうするんだろうか。

(3) 10月26日　自分の家では地震や水害に備えてどのような取組をしているのか、タブレットで写真を撮り、共有した。（自助）

【子どもたちの気づき】

・非常食を備えている家が多いと思った。
・家のつくりも考えられているね。

(4) 10月30日　災害に備えて学校ではどのような取組をしているのか考えた。学校が避難場所になったり、防災倉庫があったりすることに気づき、防災倉庫の見学を行った。（公助）

【子どもたちの気づき】

・部屋に区切れるような仕切りがあった。
・防災倉庫が二つあるけど、違いはあるのか。
・食べ物や飲み物だけでなく、服も入っていた。

防災倉庫見学の様子

(5) 11 月 2 日　災害から市民を守るために長野市ではどのような取組をしているのか(ハザードマップ、避難場所）を学習し、学区内のハザードマップを確認した。

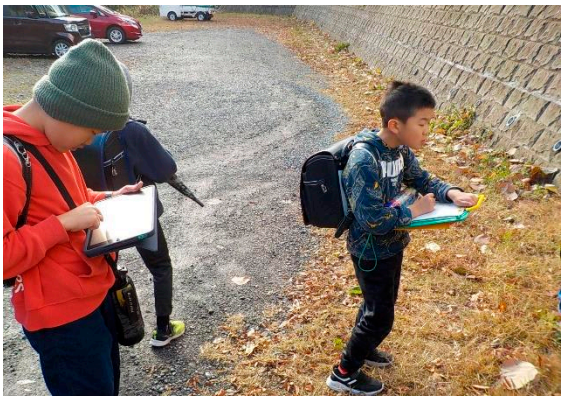
【子どもたちの気づき】

・加茂小が避難場所になっている。

・洪水や土砂崩れが起きそうな地区がある。

(6) 11 月 13 日　自分たちが住む地域の危険な場所、安全のための施設や設備を探すために、信州大学の倉澤様をお招きし、防災教育用アプリ「Field ON!」の操作方法を教わった。

(7) 11 月 20 日　廣内先生、倉澤様、信州大学の学生の皆さんに協力していただき、地区ごとに班をつくり、フィールドワークを行った。防災教育用アプリ「Field ON!」を使用し、身近な危険な場所や安全対策について地区ごとに調べる活動を行った。



フィールドワークの様子

(8) 11 月 22 日　20 日に調べた結果がまとめられたマップを見ながら、危険箇所や安全な設備について共有し、それぞれの地区の様子を確認した。

【子どもたちの気づき】

・往生地の方は土砂崩れになりそうな場所がいくつもある。

・石碑が落ちてくるかもしれないから危険だ。
・いざという時は、近くにあるお店に行けばよさそうだ。
・ひびが入っている壁は、地震が起きた時に倒れてきそうだ。
・妻科には川が流れているからあふれてくるかもしれない。

子どもたちは、各グループの発表を通して各地区の危険な場所を確認し合うことで、今まで見ていた景色が違って見えてくるようで、たくさんの発見が見られた。各班の調査結果が一枚の地図に集約されることで、それぞれの発表をスムーズに見ることができた。

(9) 11 月 27 日　「自助・共助・公助」の取組についてまとめ、防災に関して自分たちにできそうなことを考えた。

【子どもたちが考えたこと】
・自分の家の周りの危険な場所を家族に伝えたい。
・もしものことが起きた時のために家の備えをしておきたい。
・災害が起きたら、家族や周りの人と協力したい。

4　終わりに

学習の初めの子どもたちの災害への意識は、「過去に遠くで起きたもの」であり、自分の身近なものとして考えている児童は少なかった。それが、自分の住む地域を実際に歩いて調べたり、自分たちにもできそうなことはどんなことなのかについて考えたりすることを通して、「いつも通っている通学路のあそこが危険だった」「家族のためにも危険な場所を伝えたい」などの思いを持つようになり、防災への意識が高まっていった。その要因としては、防災教育用アプリ「Field ON!」を使用して実際に地区を歩く活動を行ったことが考えられる。自分たちが実際に調べて記録したものがマップにまとめられたことで、学習意欲が高まり、自分が調べた地区はもちろん、他の地区の様子にも関心が向くようになった。自分たちが住む町や地区を防災的な視点で見ることで新たな発見も見られ、これからの子どもたちの地域での生活において、大変有意義な学習となった。

そのほか２・３年生は、防災・減災学習の入門として、日本赤十字社の防災・減災プログラムを受講し、「自然の中で起こりうる災害について」、中でも「大地震の時の身の守り方」についての必要な知識を学んだ。来年度以降の学習につなげていきたい。

（文責　教諭　佐藤　航大）

長野市立裾花小学校における防災教育の充実に向けた取組について
地域との連携・地域の災害を学び伝承を考える授業から

学校防災アドバイザー派遣・活用事業

長野市立裾花小学校

1　はじめに

本校は、学校の西側を裾花川、南側を犀川と裾花川との合流点に面し、水害発生時の行動や避難について、地域や学校も関心を深めている。

戦後まもなくの昭和 24 年９月には、豪雨により裾花川の堤防が長い距離に渡って決壊し、周辺一帯に大きな被害をもたらしたことが伝えられている。この水害が、台風 19 号災害と重ね合わせ共通点が多数あることから、防災について、現代の私たちが学ぶべき多くの示唆が含まれていることが明らかになっている。

昨年度は、学校が避難所となることを想定して、地域の方の避難を想定した避難所開設の受け入れと、避難訓練の体験をしてきた。

2　今年度の主な取組

昨年度のまとめとして、５年生の総合的な学習の時間に郷土史家をお招きし、裾花川流域にある学区の特性や、善光寺大地震、昭和 24 年水害について子どもたちと学ぶ機会を得た。しかし、こうした歴史を知るだけではなく、これから起こりうる災害について、どうしたら自分ごととして考え行動できる主体となっていけるか、また、学校だけではなく防災について地域の一員として一緒に考えていくことができるかが課題となっていた。

そこで、今年度は、芹田地区防災会会長山口英男さんと一緒に考える「クロスロード」を６年のまとめとして行うこととした。

『クロスロード』
災害時に起こる様々な事象について判断を迫られる場面を想定し、ジレンマを感じる中で自分だったらどう判断し行動するかを、グループの仲間と共有しながら行う学習である。

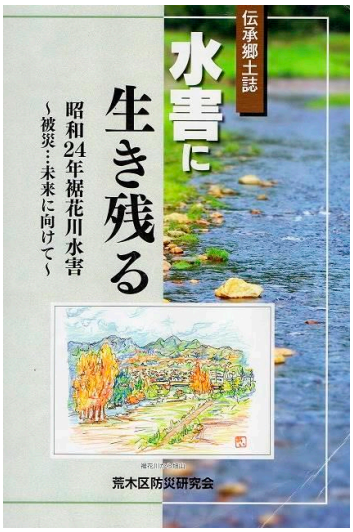
（写真：荒木地区防災研究会編　水害に生き残るより転載）

(1) 総合的な学習の時間の授業

「災害時の行動を、クロスロードを使って考えよう」

ア　ねらい

避難時に生じる課題に対し、自分の考えを持ち判断するとともに他者の考えも取り入れ、災害について積極的に考え行動しようとすることができる。



イ　地域の指導者

芹田地区　自主防災会　会長　山口　英男　さん

荒木地区の防災三本柱「生き残るための防災」「生き続けるための防災」「減災を目指す防災」を掲げ、台風 19 号水害の翌年、会の仲間と共に冊子をまとめられる。戦後間もない昭和 24 年水害の聞き取りや、資料収集だけでなく、両災害の共通点を科学的に分析し、未来に向けて「自らの命は自ら守る」ことをできるだけ多くの人たちに伝え考えてほしいと活動を続けられている。

ウ　参加者

６年３組　32 名

エ　活動の内容

山口さんよりお話

・裾花川と荒木地区の地理的特性

・昭和 24 年水害と 19 号水害の共通点

クロスロード体験

・「そのとき、あなたならどうする」

オ　今回の授業で行ったクロスロードのやり方

【グループ】　生活班　男女混合５～６人組

【ゲームの進め方】

①問題カードを担任が読み上げる（TVにも掲示）。
問題の答えは、個々に配布した「YES」「NO」のどちらかで答える。

②問題に対し、自分ならどう判断して行動するかを考え、決まったカードを裏返しにして出して待つ。

③グループ全員が出し終わったら、一斉にカードを表にして自分の意思を表明する。

④多数派の人から発言し、グループ一人ひとりの考えを共有する。

⑤みんなの意見を聞いてグループとしての「判断・決定」を書く。

⑥友達の意見は絶対に否定しないこと。多数派・少数派関係なく、発言者の考え、どうしてそう考えたかを聞き取り、自分の判断に活かす。

カ　クロスロードの課題

【課題１】
★あなたは、小学６年生です。一人で留守番をしているときに、いったん止んだと思った雨がものすごい量で降り出しました。防災無線でも非難を呼びかけています。家の前の道路も川のようです。避難所になっている中学校へあなたは一人で向かいますか？
YES：「行く」　　NO：「家人の帰りを待つ」

【課題２】
★あなたは、小学３年生の親です。会社にいるとき、自宅近くの川が氾濫したことを知りました。家では娘が一人で留守番をしていて、車で帰宅しても１時間ほどかかります。電話で娘に「家の前まで水が来ている、どうしたらいい。」とたずねられました。
YES：「避難させる」　　NO：「家にいさせる」

【課題３】
★あなたは、小学６年生です。土砂災害警報が出たため、避難することになりました。しかし、家にはかわいがっている飼い犬のタロウ（中型犬オス３歳）がいます。あなたは一緒に避難所に連れていきますか？
YES：「連れて行く」　　NO：「置いていく」

【課題４】
★あなたは、小学６年生です。家族と一緒に非常袋をもって避難してきました。しかし、周りの人は、水も食料も持っていません。お腹がすいたあなたは、その人たちの前で、水や食料が入った非常袋を開けられますか？
YES：「開けられる」　　NO：「開けられない」

キ　【子どもの感想から】

＜山口さんのお話を伺って＞

○台風 19 号での被害を忘れていたので、思い出して備えることの大切さや油断しないことの大切さがわかってよかった。

○昔の水害も台風 19 号水害も、上流から来た水が流れてきたことが原因だと初めて知った。いろいろな水害のケースを教えていただいたので、学んだことを忘れないようにしたい。

○自分の住んでいるところで雨が降らなくても、上流の地域で雨が降ったら被害が出るということが分かった。長野での被害があったことがあまりくわしく知らなかったので、お話をきっかけに知ることができたのでよかった。

○私は、水害で亡くなった女の子の話に興味を持った。お母さんが背中におぶって避難している際に、「母ちゃん」と呼んで流れて行ってしまった話を聞いて、私は水位が上がる前に避難しようと思った。

＜クロスロードを体験して＞

○実際にありそうな場面がたくさんあって判断するのにとても迷った。想像だからよかったけど、もしそうなったらと思うと心配になった。

○簡単に「Yes」「No」で決められない問題があって大変だったが、本当にそうなったときのことを考えておくことは大事だと思った。

○「Yes」「No」で友達と考えが分かれてしまったとき、友達のちがう意見を聞いて「確かにその考えもある」と思ったときがあって楽しかった。

3　学校防災アドバイザー　本間　喜子　先生（信州大学　助教）参観後のご助言

・小学校３年生の親の立場からの問題では、「マンホールに落ちると危ないから」という理由で、一人では行かせない判断をしている姿があった。今までの防災の学習の積み重ねを感じた。
・仮定がほどよくあいまいで、こまかい想定がないからこそ、イメージがふくらみ、活発な話し合いになったと思われる。みんながしっかり考えていて良かった。防災学習の６年生のまとめの学習としてクロスロードの授業を今後に引き継いでほしい。
・グループごとの発表を１回行ったが、時間の関係だろうか、その後とれなかった。グループごとの発表を聞き合う時間があるとよい。
・一人だったときどうするか。家で待つのか。一人でも避難するのか。保護者も一緒に考える機会を持つことが大事。
・参観日で保護者と一緒に考える機会をもつなどできるとよいか。
・災害のときは、複雑な状況が起こってくる。同じようなことはない。
・地域全体としてのタイムラインの作成をしている。学校のタイムラインも必要になってくる。保護者と共有しておくことが、安全な避難につながる。
・引渡しなども、やめどきややめた後の対応までタイムラインに記してあるとよい。

4　講師　山口　英男　さん　からの助言

・一人で判断する力をつけることが大事。命に関わる大事な判断になる。ステップを踏んで今回のような授業を経験させていきたい。
・クロスロードは、年齢に関係なく、子ども、大人、地域で考えられるのでよい教材だと思う。

5　今後の課題と成果

本事業に２年間取り組んできて、子どもたちとともに継続的に地域の防災について考えてくることができた。山口さんが取り組まれてきた「地域の災害の伝承」は、冊子となって実を結んでいる。これを、未来を創る子どもたちにどう伝え残していくか。学校での学びの時間は重要な位置を占めていると感じた。また、学年、年齢にあった伝承が必要だと感じた。

学校全体での避難訓練とともに、地域の方や保護者との学びの共有がこれからの課題である。地域の貴重な災害の記録を活かし、「備えあれば憂いなし」と言えるような「未来に活かす防災・減災」につながる継続的な学びを作っていきたい。

（文責　防災教育担当　教諭　湯本　英晴）

学校安全総合支援事業の取組について

―地域とのかかわりをつくるための公開防災学習会の実施について―

長野市立長沼小学校

1　はじめに

長野市立長沼小学校は、長野市の東北部に位置し、すぐ東を千曲川が北へ流れ、遠く善光寺平を囲む山々が一望できる地にある。南北に長く、その中央を国道 18 号線が通り、西の端は長野新幹線が通っている。学校は国道の西側に位置し、県のりんご栽培発祥の地であり、田畑が多く、美しい自然豊かな地域にある。

本校は、2019 年の台風 19 号により東を流れる千曲川が氾濫し大きな災害を被った。関係各所の働きや多方面からの支援により、復旧はほぼ完了し、一昨年度末には児童センターが敷地内に建設された。また、被災した保育園を地域住民の希望で「小学校の近くに」と校庭を縮小し、その場所に保育園を建設し、この４月より開園された。なお、被災によって使われなくなったプールは取り壊され、駐車場となった。

令和５年度の学級編成は、各学年１学級とりんご(自情障)学級、そして本年度新たに、わかば(知障)学級を新設した。全校８(２)学級で、児童数は男子 36(２)名、女子 45(２)名、合計 81(４)名である。なお、令和６年度には学校創立 150 周年を迎える。

2　長野市立長沼小学校の防災学習について（概要）

令和元年度の被災以降、児童への精神的な負担を考慮しつつ、児童には水害への意識を高めるため、各学年に応じた防災学習を積み重ねている。また、毎年 10 月 13 日を「長沼防災の日」と位置づけ、大切な学校行事の一つとして、全校児童が防災について学習・発信する機会としている。

令和２年度は、被災およびコロナ禍による体力の低下やストレスの発散について取り組んだ。また、感謝の会を設け、被災のときに支援していただいた方々に謝意を伝える機会を設けた。

令和３年度より、長沼住民自治協議会と連携しながら、３年間のローテーションで防災学習のカリキュラムを計画し、実施をした。令和３年度は、地域の方も招き、防災について学習したことを全校で共有する学習発表会を行った。

令和４年度は、水平避難の訓練として、全校で北部レクリエーションセンターに避難し、引渡し訓練を行った。

令和５年度は、地域の方をお迎えして防災の時に役立つ知識について、防災推進委員や日赤奉仕団の方々より体験を交えた学習を実施した。

この「発表・発信」(各学年や全校で防災について学習したこと)、「訓練」(水害を想定した避難の実体験)、「連携」(地域の方との交流を活かした防災への意識の向上)の３つを

ローテーション化し、児童が本校在籍中に２回経験できるようなカリキュラムをつくるとともに、各学年で年齢や教科の学習に応じた防災学習も実施している。

さらに６年生は、特定非営利活動法人 SEEDS　Asia 様の仲介による、海外や県外の学校との交流(マイホームタウン)や、信州大学の廣内先生の呼びかけによる防災サミットへの参加も行っている。

３　地域の方を学校に迎えた防災学習について

本年度は「連携」(地域の方との交流を活かした防災への意識の向上)の年であり、地域の方も参加し防災学習ができるように住民自治協議会と連携し、防災学習を行った。

第一部は講演。住民自治協議会事務局長の住田昌生様から、防災についてのお話をお聞きした。住田様が自作した資料を見ながら学習をした。20 分間であったが児童全員が集中して聞くことができた。

第二部は実技。４つのブースを計画し、(1)応急処置、(2)新聞紙を用いた緊急時の防災グッズづくり、(3)避難する際に最低限身に着ける防災ポーチの設計、(4)災害時の二次被害について、縦割り班ごとに児童のみでの協働学習を実施した。

４つのブースの講師は、長沼住民自治協議会の防災推進委員や日赤奉仕団の方々に担当していただいた。丁寧にご指導いただき、どの子も充実した表情が伺えた。子どもたちはこの日のために地域の方々の参加を呼び掛けるチラシを作成し、各区長様に配布していただいた。当日は、地域に住んでいる方が講師として参加してくれたため、地域の方と児童との交流を行うことができた。また当日は、県内の全テレビ局や県内で購読されている新聞社の取材があり、この行事の重大さや関心の高さを改めて知ることができた。

【新聞紙スリッパをつくる児童】

【地域の方に応急処置をする児童】

【地域の方と家庭の防災対策を考える児童】

【防災ポーチの中身を考える児童】

4　学校防災アドバイザー（信州大学　廣内大助先生）の関わり

４つのブースを作成するにあたり、ブースの内容を廣内先生と直接お会いした際や、メールで相談をした。本年度の長沼防災の日を計画するにあたり、松代すごろくを用いたブースを検討していたが、内容と実施にあたっての課題をいただき、学校で検討した結果、家庭内の防災対策のブースに変更となった。

なお、事前指導いただいた廣内大助先生は当日先約があり、ご都合が合わなかったため欠席であった。

5　事業の成果及び今後の課題

災害以来、信州大学の廣内先生には、学校から防災教育の推進について連絡しているだけでなく、住民自治協議会からも地域の防災について相談を持ち掛けている。今後も学校と地域が連携して地域の防災と学校の防災教育を考えていく上で、学校防災アドバイザーの廣内大助先生は、本校と地域に欠かせない存在である。

しかしながら、学校での学習発表会や避難訓練等は平日に実施するため、地域の方の参加や協力が難しいのが現状である。また「長沼防災の日」は時期的に、校区の農家にとっては繁忙期のため、参加者が少なくなることが予想され、この事業に対する地域の方々との連携が課題となっている。

6　まとめ

本校の防災教育についてはいくつかの課題は残るが、来年度以降も地域との連携の足掛かりとなる事業となった。次年度も活用できるのであれば、専門的な視点から学校での防災教育のあり方や防災における地域との連携について、廣内先生のアドバイスをいただきたいと考えている。

（文責　教頭　駒村　久登）

学校安全総合支援事業の取組について

―　地域とともに総合防災教室　―

長野市立信里小学校

1　はじめに

信里小学校は、長野市の南に位置する茶臼山の山腹に位置し、児童数 31 名の山間小規模校である。東には眼下に長野市街地が広がり、北にはアルプスの峰々が一望できる自然豊かな環境にある。農業が盛んで、りんごや野菜の栽培の他に、400 を超える溜池を水源に稲作も広く行われている。茶臼山はかつて大規模な地滑りが発生したことでも知られている。現在でも地滑り防止のための維持管理が続けられ、地滑りの跡地は恐竜公園や茶臼山動物園として利活用されている。地域の災害特性としては、土砂災害が挙げられるが、耕作放棄地の増加に伴って使われなくなった溜池も潜在的な危険がある。大雨の時には側溝から水が溢れ出たり、強風や落雷の時に身を隠す場所が少なかったり、傾斜地特有の気象災害への備えも必要である。

2　防災教育の取組

本校は、本支援事業の指定を受け 10 年目となる。学校防災アドバイザーの先生方にご指導をいただき、「自ら考え行動できる子どもの育成と地域と連携した防災活動」をめざして、信里地域委員会（住民自治協組織）と連携し、「信里地区総合防災教室」を実践してきた。そして、今年度は下記のような実践を行った。

3　信里地区総合防災教室の実践

(1) 活動の流れ・概要

信里地区総合防災教室　　９月９日（土）授業参観日として開催

１校時　校内の安全設備を見つけよう（縦割り班でのスタンプラリー）

２校時　避難訓練・消火訓練・煙体験

３校時　全校で防災学習「防災マップ作りに向けて～地域の危険箇所・安全施設～」

４校時　土砂災害学習

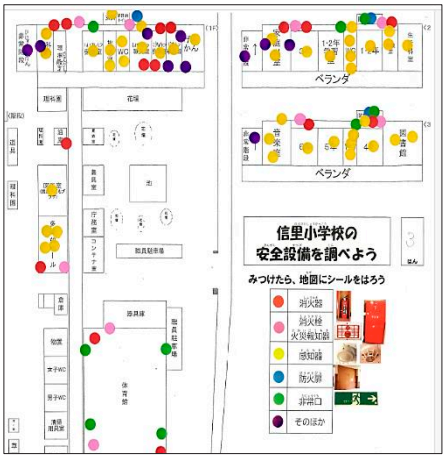
参加者　全校児童 31 名、保護者 27 名、地区役員 16 名（各地区長、地域委員会事務局）、学校評議員３名　　計 77 名

(2) 防災教室の様子

ア　校内の安全設備を見つけよう（縦割り班でのスタンプラリー）

校内の安全設備（消火器、火災検知器など）を縦割り班で探しながら校内を歩き、校内地図に見つけた設備ごと色分けしたシールを貼っていった。いくつ見つけられるか、何種類見つけられるか、どうしてその場所にあるのかなどを考えることで、校内の防災に対する意識を高めてほしいと願って行った。普段は何気なく過ごしている場所に多くの設備があることに気づく児童、保護者の姿があった。

＜児童の感想＞
・感知器が体育館のステージにもあって驚いた。
・全種類の安全設備が見つけられた。
・感知器がどの教室にもあり、いつどこで火事があってもわかるようになっていた。
・転倒防止が本棚や棚にあった。防火扉がどの階にも一つずつあった。
・いつもはあまり気づかないところにたくさんの安全装置があってびっくりした。もし地震などが起こったときに、このような設備があると被害なども減ると思った。意外なところにあったので、何に使うかも考えてみたい。



イ　避難訓練・消火訓練・煙体験
　支援者　　篠ノ井消防署４名
　参観日に教室に集まった保護者(28 名)や地域住民(10 名)計 38 名が、児童と共に緊急地震速報受信システムの音声を聞き、避難訓練を体験した。また、４～６年生の児童４名と職員２名が、消火器（水）による消火訓練を行った。さらに、特別教室に煙を発生させ、体を低くしながら出口まで歩行する避難体験をした。煙がどれだけ危険で怖いかを実感し、避難の仕方を体験する機会となった。

＜児童の感想＞
・避難訓練は落ち着いてできたので、本当に火事などが起きたときも落ち着いてできるといいです。
・「おはしも」は知っていたけど、「おはしもち（ちかよらない）」があるのは知らなかった。
・消火器をいざ自分がやるとしたら少し不安だったけど、訓練で見たら安心した。
・煙体験は視界がまっ白でびっくりした。どこに何があるのかわからず怖かった。
・煙で全然見えなかったから、低く構えるのは大事だなと思った。

ウ　土砂災害学習
　支援者　　土尻川砂防事務所、砂防ボランティア　４名
　児童、保護者、地域住民が一斉に土砂災害について動画を見たり講話を聴いたりした。また、土石流災害を防ぐ堰堤の模型実験と雨の降り方についての説明を２グループに分かれ交代して行った。土砂災害について詳しく知らない保護者も多く、この機会に土砂災害の種類や怖さ、堰堤や砂防ダムの重要性を知ることができ、有意義だった。雨の降り方や雨量が土砂災害に大きく影響することから、簡易雨量計のキットの作成方法、活用法を教えていただいた。家庭に配布し、作成と活用をお願いした。

＜保護者の感想＞
・土砂の勢いに驚きました。土砂災害の恐ろしさを改めて感じた。
・ビー玉の実験を通して、砂防ダムの役割やその重要性を知ることができた。
・ハザードマップをもう一度確認したい。日頃の備えと早めの避難を心掛けたい。
・最近ゲリラ豪雨が多いので怖いが、砂防によって被害が軽減されることが分かった。
・地震や大雨の時はニュースや警報を見て、外の音に敏感になる事が大切だと分かった。

エ　信里防災マップづくりに向けて　～第一避難所までの危険箇所などを知る～
支援者　各地区の区長 15 名、保護者 27 名　計 42 名

地区児童会ごと４つの教室に分かれ、児童が保護者と歩いて撮ってきた自宅から第一避難場所までの危険箇所等の写真を見せながら、その場所の説明（危険・安全な理由等）をする。その発表を聞いて、気づいたことや聞きたいことなどを出し合う。区長や保護者も話し合いに参加し、過去の被害の様子等、児童が知らない情報を加えていく。まとめでは、各教室を Zoom でつなぎ、学習して分かったことや感想などを発表し共有した後、防災アドバイザーの先生のお話を聞いた。

＜児童の感想＞
・もう一度家のまわりの危険なところを確認したいと思った。
・いろんな危ない場所があるから、登校のときや家の近くを歩くときは気をつけたい。
・もし災害があったら、撮ってきたところに気をつけて公民館まで行きたい。
・古い家が危険、池がよく見えないところが危険、ため池があふれると危険だと思った。
・道が急に狭くなったりして、車がきて危ないところもあったし、木が倒れて危ない所があった。気をつけたい。
・自分が見た以外にも危険な場所を知ることができた。
・古い空き家がたくさんあって、地震がきたら倒れて危険。
・普通に通れている道でも、いざというときは危険だと思った。
・普段あまり気にせずに通っている所とか、木が崩れそうな所とかがあった。公民館が少し古いけれど、安全な避難場所を有旅の人と先生たちとしっかり確認できた。

(3) 防災アドバイザー　廣内先生の指導より
・避難訓練では地震や火事など様々な想定がある。警報の種類や仕組みを知った上で、もしもの時どう行動するのか、行動に起こす体験をし、やってみて考えることが必要。
・自分の家から避難所までどうやって行くか考えることはすごく重要。冠水、土砂崩れ、木が倒れたら、蜂や蛇は？など、普段はないが、もし何かあったら…、と考え、自分の命を守る学習ができた。自分の力でできないときは…、避難の途中だったら…、などいろいろなパターンで考えていく。
・まとめていく途中で、信里にどんな危険なところがあるのか、みんなで確認し、教え合う。さらに避難した次はどうする？さらに何ができるか？と考えていきたい。
・大人が見て何でもなくても、子どもの視点で教えてもらうことがある。どうすれば不安がなくせるか、お子さんと話して、また大人の視点に戻っていくとよい。
・地域のこと、信里全体のことを考えていきたい。

4　防災アドバイザーとの関わり

(1)　７月21日(火)10:00～12:00　信州大学教育学部　廣内大助先生(本間喜子先生Zoom)

・地域と共催の信里地域総合防災教室の事前打ち合わせを区長会長１名、土尻川砂防事務所２名、学校２名　計７名（アドバイザー含）とともに行う。

(2)　９月９日（土）8:30～12:30　信州大学教育学部　廣内大助先生

・地域と共催の信里地域総合防災教室の参観と指導

(3)　12月21日（木）8:55～10:30 信州大学教育学部　廣内大助先生

特定非営利活動法人DoChubu　落合鋭充氏

「信里地区防災マップづくり」授業の指導

・各自宅と第一避難場所までの経路を確認し、地図に書き込む。防災マップへの反映。

・各自撮ってきた危険箇所の中から、各地区で地図に載せる写真（３枚以下）を選び、コメントを修正する。

・記録したものを地図に反映させるための技術的な指導

5　まとめ

(1)　<u>地域との共催で防災意識を高め、さらに地域へ発信</u>

防災マップ作りに向けて、子どもたちは保護者とともに自宅から第一避難場所までの道を歩き、危険箇所や安全な場所などをタブレットで撮影してきた。災害の時に避難する経路を歩くことで、ここでもし災害が起きたら…と想像し、危険な場所や避難できそうな場所などを保護者とともに確認することができた。またその内容を地区ごとに発表し共有することで、地域を知り、防災に対する意識が高まった。区長や保護者も参加し、助言や質問をするなど共に学び合う機会となった。さらに、その学習を生かした防災地図の完成を目指し、廣内先生と落合先生のご指導のもと授業を行った。児童は避難経路を確認し、地図に入れる危険箇所（写真）を厳選し、注意喚起する言葉を考えるなど、自分の住む地域の安全について真剣に考え、話し合った。子どもの目線で作成したこの信里の防災マップを地域に向けて配布し、さらに地域の防災、安全を発信していきたいと考えている。

(2)　<u>災害に備えるために</u>

人口の減少等から地域での防災訓練が難しい現状であることから、地域住民も参加した避難訓練、煙体験は、重要な役割を担っていると感じた。だからこそ、様々なパターンを想定した訓練を取り入れていく必要がある。学校の安全設備のスタンプラリーは、もしもの時に備え、自分の身を守ることにつながる活動となった。

土砂災害の講演や実験では、初めて知る児童、改めて実感する保護者や地域の方の姿があった。自分の住んでいる地域に潜む危険を目の当たりにしたことで、他人ごとではなく自分のこととして考え、家族で災害への備えを考えるきっかけにもなった。

今後も、学校のこうした活動が信里地域の防災や安全を担うことにつながっていくと思われる。自分たちはもとより、保育園児やお年寄りなどみんなと助け合いながら災害から身を守るための活動を、地域とともに充実させていきたいと考えている。

（文責　教頭　鷹野　絵理）

学校安全総合支援事業の取組について

―塩崎小学校における防災・減災教育の充実に向けて―

長野市立塩崎小学校

1　はじめに

塩崎小学校は、長野市の南部にあり、JR 稲荷山駅の東側に位置する全校児童 212 名の中規模校である。今年度 150 周年の節目を迎えた。学区は、北東の東篠ノ井地区から南西の長谷・越地区まで約８㎞と大変広く、千曲川沿いに住宅や田畑が並んでいる。2019 年（令和元年）の台風 19 号では、千曲川および岡田川の越水によって、児童宅を含む地域の住宅の一部に床下浸水等の被害があった。現在も校区内の堤防の強化工事が行われているところがある。

台風 19 号の被害から４年が経ち、当時の学校の様子を知る職員も少なくなってきているが、防災・減災についての職員の意識をより一層高めたいと考え、本事業の活用を申請した。

2　塩崎小学校の防災体制について（概要）

(1) 自衛消防組織

ア　第１次活動

本部	学校長　他	◇本部設置　情報の収集と整理　避難命令と各係への指示・命令
通報・連絡	教頭　他	◇消防機関への通報　　関係機関への通報・連絡 ◇校内への非常通報
避難・誘導	学年主任　他	◇避難上の障害物の除去 ◇避難後（２次活動中）の児童の安全管理
見回り	学級担任　他	◇避難後の校舎の見回り　未避難児の確認と救出

イ　第２次活動

消火	教務主任　他	◇消火器による初期消火 ◇屋外消火栓等の管理
警備	警備係職員	◇消防関係者や緊急車両の誘導等　部外者等の整理
救護	養護教諭	◇応急救護所の設置　負傷者の応急処置

(2) 避難訓練等実施状況

ア　第１回避難訓練

(ｱ) 実施日　４月 11 日　２校時

(ｲ) 訓練の重点・目的

・授業中における地震による火災を想定し、緊急時の避難経路や誘導方法の確認をする。

・各係（消防組織）の任務の確認をする。

(ｳ) 学習内容

・学級指導（避難訓練の注意事項の確認等）

・避難命令

・避難行動

・消防組織係活動

(ｴ) 学習の実際

・新１年生は入学して４日目の避難訓練であったが、放送を聞き、落ち着いて校庭に避難できた。

イ　全校引渡し訓練

(ｱ) 実施日　６月 13 日　５校時終了後

(ｲ) 訓練の重点・目的

・授業日に地震・洪水等の災害が発生し、通学路に危険が生じる恐れがあり、保護者への児童引渡しが必要になった際の、確実かつ安全・迅速な引渡し方法を確認する。

(ｳ) 学習内容

・緊急メールを流す

・緊急帰宅の指示

・児童は教室にて待機

・保護者は徒歩または自転車で来校

・保護者は教室前で整列し、担任が引渡し名簿により一人ずつ確認を行った後に下校

(ｴ) 学習の実際

・近年、１年生のみ実施をしており、全校引渡し訓練は 10 年ぶりの実施であったが、大きな混乱等なく、整然と引渡しができた。

ウ　集団下校訓練

(ｱ) 実施日　７月 13 日　５校時地区児童会終了後

(ｲ) 訓練の重点・目的

・害獣の出没や不審者事案の発生等で集団下校しなければならない状況になった時に、安全に落ち着いて下校できるようにする。

(ｳ) 学習内容

・学級指導

・下校命令
・地区別に校庭に集合　人員報告
・地区別に登校班ごとに並んで下校

(ｴ) 学習の実際
・地区担当職員、地区役員、学校運営委員がそれぞれの担当地区に分かれ、通学路を通り下校させた。

エ　第２回避難訓練
(ｱ) 実施日　９月１日　業間休み
(ｲ) 訓練の重点・目的
・休み時間における地震による火災を想定し、緊急時の避難経路や誘導方法の確認をする。
・各担当場所の避難誘導の確認
(ｳ) 学習内容
・学級指導（事前の告知は行わないが、休み時間に災害が起こった場合の緊急時集合場所を確認する）
・避難命令
・避難行動
(ｴ) 学習の実際
・熱中症予防のため、校庭には集合せず、緊急放送を聞いて緊急時集合場所に集合し、各集合場所担当職員より注意事項を聞いた。
・校庭で遊んでいる児童のうちの一部が、慌てて校舎内の集合場所に戻ろうとしていたため、各学級で重点的に指導を行った。

オ　第３回避難訓練
(ｱ) 実施日　11 月１日　２校時
(ｲ) 訓練の重点・目的
・火災等の災害を想定し、緊急時の避難経路や誘導方法の確認を行う。
・各係（消防組織）の任務の確認をする。
(ｳ) 学習内容
・学級指導（避難訓練の注意事項の確認等）
・避難命令
・避難行動
・消防組織係活動

・篠ノ井消防署塩崎分署署員による講評と職員への指導
・防火扉の作動確認および通過訓練
(ｴ) 学習の実際
・４月当初より落ち着いて避難できた
・防火扉の作動確認ができた
・防火扉を通る体験をしたことで、火災の際の避難方法を確認できた

3　学校防災アドバイザーの関わり

(1)　「学校防災計画」「洪水タイムライン」に関する指導・助言

ア　実施日　12 月 28 日（木）14：00～

イ　指導・助言

(ｱ) 避難訓練について

・放送機器が使用できない場合など、実際に近い訓練を想定して行う

・調理室など特別教室からの避難訓練も行う必要がある

・３年程度のスパンで様々な訓練をローテーションして行う

(ｲ) 洪水タイムラインについて

・河川の水位によって、授業をやめる判断、保護者への引渡し（車での来校想定水平避難を行う時を決めておく

・保護者への周知も事前に行っておく

(2) 水害に係る校内職員の研修

ア　実施日　１月 24 日（水）15：20～

イ　研修内容

(ｱ) 令和元年　台風 19 号襲来時の校区の被害状況から学ぶこと

（防災担当職員より）

(ｲ) 学校防災アドバイザー　廣内大助先生より講義および質疑応答

・塩崎地域の地形の特徴

・水害を想定した避難訓練のあり方について（「洪水タイムライン」をもとに）

(ｳ) グループ協議

・児童引渡しの際の職員の動きについて（担任不在時など様々な場合を想定して）

4　事業の成果及び今後の課題

(1) 昨年度末に「洪水時避難確保計画」を作成したが、近隣に避難できる場所がなく、地域の長谷寺（移動距離 2.3 ㎞）に承諾を経て洪水時の避難場所に設定した。しかし、長谷寺まで全校児童が徒歩で向かう訓練が実際には行えていない。他の行事との兼ね合いもあり、これ以上訓練を増やすことが難しい状況がある中、廣内先生より、避難訓練の内容を３年で一巡するカリキュラム編成を、とのアドバイスをいただき、来年度より実施していきたい。

(2) 今年度は職員の防災意識を高める目的で研修を行ったが、児童に対する防災学習の必要性を感じている。今後も本事業を活用して、学校防災アドバイザーの先生にアドバイスをいただきながら、本校の防災管理や防災教育の充実を図っていきたい。

（文責　教諭　阿部　明子）

学校安全総合支援事業の取組について

―松代地域連携防災学習―

長野市立松代小学校

1　はじめに

松代小学校は、児童数 272 名、学級数 14、長野市東部にある松代地区の中心部に位置している。松代地区は、松代城を中心に広がる城下町である。学校の西側には、千曲川に流れ込む神田川、東側には蛭川があり、2019 年の台風 19 号の際には、洪水被害に見舞われた。また、1965 年から５年半もの間、松代群発地震にも襲われた地域である。

2　長野市立松代小学校の防災体制について

毎年、火災・地震・水害を想定した避難訓練を年３回、火事・水害・地震・防犯・交通安全に関する指導や学習を年２回、地域連携防災学習を１回（計画のみ)、保護者引渡し訓練を年１回実施していた。しかし、令和２年度から昨年度までは新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、消防署と連携しての避難訓練や地域連携防災学習は行われなかった。

3　地域連携防災学習について

2019 年の台風 19 号の洪水被害から、自主防災会と連携して地域防災学習の計画が始まった。台風 19 号の際は、本校はグランドが浸水し、児童の中にも被災した家庭があった。当時の洪水被害を教訓に学んでいこうと、地域連携防災学習は毎年計画されてきたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、実施されていなかった。

4　地域連携防災学習

(1) 日時　　令和５年 10 月 25 日（水）

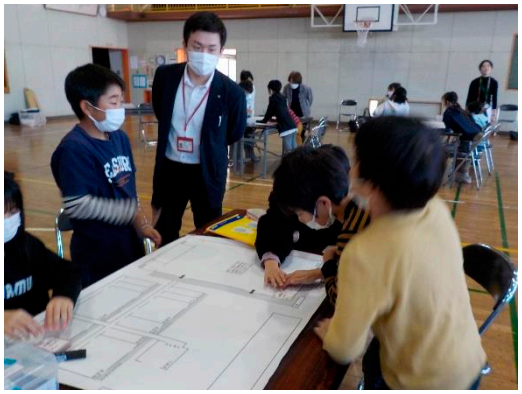
(2) 内容

ア　１・２校時　４学年　ＨＵＧゲーム　　「松代小学校に避難所が開設されたら」

講師　日本赤十字社長野県支部

場所　松代小学校体育館

４年生は、社会科で防災に関する学習を行っている。今回は公助について学びたいということで、日本赤十字社の宮入さんを講師に、４年生が避難所運営者となって、様々な避難者を受け入れていくというＨＵＧゲームを行った。本年度、松代地区では、住民自治協議会が主催となって防災人材育成講座を開催しており、その関係者も参観に来ていた。



学習は、赤ちゃんや高齢者のいる家族、インフルエンザの人、杖をついている人、犬を連れている人、看護師免許をもっている人など、様々な人が避難をしてくる中、４年生はグループの人と話し合いながら避難者を受け入れていくという体験型学習だった。「この家族とこの家族、仲良くなれたらいいから近くにしよう。」「杖をついていても元気だから家族と一緒にいたいよね。」などなど、避難してくる人の立場に立って真剣に話し合っている４年生の姿があった。

イ　３校時　５学年　「防災かみしばい」に学ぶ

講師　松代復興応援実行委員会

場所　松代小学校多目的室

５年生は「防災かみしばい」を中心に2019 年の台風 19 号の洪水についての学習を行った。「防災かみしばい」は、2019 年の松代地区の水害を忘れず、今後に生かしていくことを目的に、松代地区の方々によって作られた紙芝居である。松代地区の方々は、水害が起きた時にも協力し合って対応をしたが、水害が起こった後にも協力し合ってその時のことを記録として残した。児童の中にも水害の記憶は残っているが、当時小学校１年生ということと被害にあわずに済んだ家庭もあり、今回の紙芝居で多くのことを学ぶことがきた。紙芝居の後には「まつしろ防災すごろく」を紹介され、自分たちでもすごろくを作るなどの学習に発展していった。また、地域の危険個所や防災設備への関心が高まり、地域防災マップ作りに発展していった。

ウ　５校時　４・５年　避難所炊き出し見学・防災倉庫見学

講師　日赤奉仕団松代分団

場所　北校舎横

日赤奉仕団松代分団の方々が行う炊出しの様子を見学した。松代分団長から 2019 年の台風 19 号水害の際には、被災地域におにぎりやきのこ汁を配ったことやその時の人々の様子をお聞きした。炊出しで作れる料理も紹介され、そのレパートリーの多さに児童は驚いていた。この日は、生米、水、ケチャップ、野菜などを入れた袋を防災倉庫から出したガスコンロと大鍋で湯煎したケチャップライスを作る様子を見学した。「奉仕団の人たちもおなかがすいている中、おにぎりなどを配ったと聞いてあ

りがたい気持ちになった」「奉仕団がいてくれたらまた大きな災害があっても安心できる」という感想が児童から聞かれた。困っている人たちのために働く奉仕団の方々の姿は、子どもたちの中に感動を残した。

(3) 地域防災マップ作り

５年生が地域連携防災学習から、地域の防災について興味をもち、それぞれのクラスで地域に出かけて水害や地震の時に危険なところや安全なところ、役に立ちそうなものを探し始めた。フィールドオンという防災教育用アプリを使い、写真や気づいたことを書き込んでいくことで、地域の防災マップができていく。防災という視点で地域を歩くことによって、普段とは違う発見ができたようであった。児童は「３枚しか写真を撮れませんでしたが、結構あるなと思いました。おすわさんの池が結構危ないなと思いました。大雨が来て、水位が上がったら結構怖いと思いました。それに空き家も結構あるので倒れてきたらいやだなぁと思いました。これから備えていきたいです」「とても危険な池があったり、今にもこわれそうな空き家などがあったり、たくさんの危ない場所がありました。だからこれからも松代の危険な場所や安全な場所をしっかり覚えて避難するときにしっかり安全に避難できればいいです」などと感じたようであった。

５　学校防災アドバイザーの関わり

信州大学の廣内大助先生と内山琴絵先生には、地域連携防災学習の内容についてアドバイスや講師の紹介をしていただいた。４年生は、社会科での防災学習が進んでいたこともあり、自助・共助・公助の中の公助にあたる避難所についての体験型学習を行いたいとの希望があった。そこで、廣内先生からＨＵＧゲームを紹介してもらい、日本赤十字社の講師の方を紹介していただいた。しかし、ＨＵＧゲームの対象年齢は中高生と高く、４年生用に行ってもらったほうが良いことのアドバイスをいただき、担任と講師が打ち合わせを重ねてＨＵＧゲームを行うことができた。廣内先生と内山先生は、松代地区の住民自

治協議会が主催となって開催している防災人材育成講座でも講師として関わっていただいており、担任たちに松代小学校体育館での避難所開設訓練に立ち合い、動画をとることもアドバイスしていただいた。そのことによって児童は松代小学校が避難所になるイメージをもってゲームに臨むことができた。当日は、アドバイザーとして授業に参加していただいた。

５年生の担任には、「猪の満水（2019 年台風 19 号災害）災害デジタルアーカイブ」を紹介し、「防災紙芝居」を見た後の地域防災マップ作りについてアドバイスをいただいた。防災マップ作りで使用するアプリの使い方を児童に指導していただいたり、校外学習に参加し、地域を防災という観点で見るためのポイントを指導していただいたりした。

6　事業の成果及び今後の課題

地域連携防災学習の初年度として、信州大学の廣内先生と内山先生にアドバイスをいただいたことで、松代小学校に合った地域連携防災学習を行うことができた。職員も知らなかった猪の満水（2019 年台風 19 号災害）災害デジタルアーカイブやＨＵＧゲームの紹介、授業への活用の仕方、講師やアプリの紹介などのおかげで、児童の学びたい思いを支えることができた。今後は、松代小学校の児童はどの児童も地域の防災について学び、防災に対する知識や意識を高めていけるよう、地域連携防災学習を続けていくことが課題である。

7　まとめ

2019 年の台風 19 号災害は記憶に新しく、また、松代という地区は昔から幾度となく水害に襲われてきた地区である。地域の方々と話をすると松代群発地震のことがたびたび話題に上り、住民自治協議会で防災人材育成講座を開催するなど、防災意識が高い地区でもある。そんな松代地区にある学校としては、地域に即した防災学習を行うことは大変重要なことであった。アドバイザーの先生方には、地域にも学校にも同時に関わっていただいたことで、学校と地域をつなぐ役割をすると同時に、学校で学習することと地域で学習することの違いを明確化していただいた。そのことにより、松代小学校の児童にあった防災学習を推進することができた。今後も、児童の学びたい思いに寄り添いながら、地域の防災活動を担っていく児童を育成していきたい。

（文責　教頭　大橋　あゆみ）

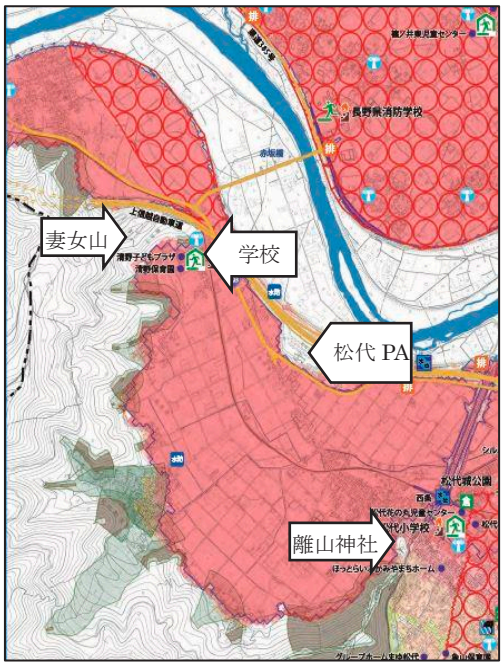
清野小学校における、学校安全総合支援事業の取組について

親子防災教室　講 演 会：「松代地区　水害の歴史」（青木一男先生）
親子活動：親子で「雨量計を作ってみよう」
５年生：「防災博士になろう！～今できることってなんだろう～」

長野市立清野小学校

1　はじめに

本校は長野市南部の松代町内にあり、千曲川の右岸に位置する。校庭の東側には清野保育園があり、合同で避難訓練を行っている。学区内は、学校西側で千曲川堤防沿いに位置する１区（松代町岩野地区）、学校の南東で南側に山が連なる２区、学校東側で大部分は平地部の３区（ともに松代町清野地区）の３地区に分かれている。児童数は 28 名で、徒歩で集団登下校をしている（下校については、子どもプラザ利用の児童を除く）。



学校及び学区のほぼ全体は、令和元年改訂の長野市洪水ハザードマップで５～10mの浸水予測が出されている。また、地域の南側には山が連なっているため、土砂災害警戒地域になっているところもある。この地域は水害常襲地域でもあり、過去には江戸時代の「戌の満水」（1742 年）や昭和 57 年の台風 18 号災害で浸水被害を受けている。なお、戌の満水の際には、学区東端のやや小高くなった部分の上にある離山神社の境内に多くの人が避難したとの記録がある。

令和元年の台風 19 号災害においては、学区内で大きな被害はなかったが、千曲川堤防の上端ぎりぎりまで水が迫り、多くの子どもたちが家族と共に親戚宅や指定避難場所へ避難する等、有事の際には身の安全について考えなければならない地域である。

2　本校の防災学習

令和元年度、４年生の児童が、総合的な学習の時間に、洪水が起きたときの行動を考えるための学習を行った。この学習は、自分たちの住む地域がハザードマップで赤く塗られ、浸水想定区域となっていることを知った子どもたちが、周囲よりも高く安全な場所はどこなのかを考えるところから始まった。信州大学教育学部教授の廣内大助先生をはじめとした関係者の方々にご協力をいただき、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ「フィールドオン」を利用し、危険だと思われるところや安全だと思われるところの写真を撮ってアプリ上のマップに反映させるフィールドワークに取り組んだ。

これ以降、本校では実践的な防災学習を行ってきている。

	全校親子防災教室	３年生	５年生
令和 ２年度	「親子で通学路の危険個所を点検しよう」	「洪水が起きた時の行動を考えよう」	「防災マップ作り」
令和 ３年度	「我が家のタイムラインを作成しよう」	「清野地区の洪水発生時における安全な場所調べ」	「清野の土砂災害について調べよう」
令和 ４年度	「非常時に持ち出すものを確認しよう」	「地域の防災設備について」	「避難時の支援行動について」
令和 ５年度	講演会「松代地区の水害の歴史」・「雨量計を作ろう」		「防災博士になろう～今できることってなんだろう？」

３　本年度の取組について

(1) 親子防災教室　講演会「松代地区　水害の歴史」　講師　青木一男先生
全校親子活動「雨量計を作ろう」

ア　ねらい

松代地区における台風 19 号時の水害の経験談や、これまでどのような水害の歴史があったのかを知ることで、自分たちの住む地域と水害について考え、防災意識を高めることができる。また、簡単な雨量計を作ってみることで、ゲリラ豪雨など昨今の異常気象や天気予報、避難の目安など、生活と雨量とのかかわりを考えることができる。

イ　参加者

全校児童 28 名、保護者 22 名、学校職員９名

ウ　活動の概要

・参観日に設定し、親子でともに考えることができるようにした。

・前半の講演会では、地域の水害について詳しい青木一男先生を招き、清野を含む松代地域の水害の歴史やその時の様子、供養や減災を願う百万遍のお数珠回しなどの話をお聞きした。

・後半では、ペットボトルを利用した雨量計の作り方を５年生が各学級に説明し、親子で一緒に作成した。

エ　活動後の声

・講演をお聞きして、４年前の台風 19 号の時の避難経験を思い出した。これまでも大きな水害に見舞われていた松代地区だということを知り、備えをしっかりしておきたいと改めて思った。（保護者）

・江戸時代の戌の満水のことを知り、こんなに昔から水害が起きる地域だったということを知ることができた。自分の住む岩野地区でも、160 人も亡くなり、144 軒もの家が流されてしまったのはびっくりした。供養の石碑が地域にあるが、この時のものなのだと知ることができてよかった。（児童）

・台風 19 号の時、清野の自分の家は大きな被害はなかったけれど、少し先の松代小学校の辺りではこんなに校庭が浸水してしまっていて驚いた。同じ松代地域なので、水害はこれからもあるという意識をもって、その時に慌てないように色々考えておきたいと思った。（児童）

・夏に、天気予報で雨量が 50 ミリなどと聞いたことがあって、それが雨量計でこのくらいを指しているということを初めて知った。(児童)

(2) ５年生：総合的な学習の時間

「防災博士になろう！～今できることって何だろう？～」

ア　ねらい

これまでの防災学習や実際の災害経験をもとに、児童一人一人が調べてみたい課題を見つけ個人やグループで学習を進めていく場面で、地域を知るフィールドワークや、防災活動をされている地域団体の方との交流、地域に住む方々へのアンケート実施などを通して、より実践的な防災・避難の知識を身につけるとともに、備えとして今できることに焦点をあてながら、様々な角度から防災について考えることができる。

イ　参加者

５年生児童７名、信州大学学生１名

ウ　活動の概要

・児童一人ひとり、今知りたいことの個人課題を本やインターネットで調べる。
(以下テーマ)

松代はどうして水害が多いの？	避難所で困ったこと	自分の地域の危険個所→どこに避難するの？	避難所ってどのように生活するの？	台風が来たときの逃げ方	本当に必要な防災グッズ	それぞれの地区の危険個所

調べ学習の中で、共通してきた課題

水害の実際や、避難所での様子を知りたい！ ↓ *「ちゃかぽか松代」さんと防災学習* (台風19号時の経験談より：備えておくとよい物・家族と考えておくこと・避難所での食事について)	非常食ってどんなものが用意できる？ ↓ *・身近なお店で調査（スーパー・コンビニ）* *・地域の方にアンケート*	地域の川や旧河道・土地の高低・避難できそうな場所について、実際に見てみたい ↓ *フィールドワーク* (蛭川・神田川・３つの地区の避難できそうな場所調査)

・図書館の本や、インターネットでの情報を主に、まずは自分で調べられるところまで調べ学習を進める。

・共通する課題や、分からないところは友だちや信州大学の学生と考えるなど、学習形態は常に自由に選択できるようにする。

・地域の方の生の声や経験談を聞いたり、実際の土地の様子を見に行ったりすることで、地域の防災課題について主体的に考える。
・廣内先生（信州大学教育学部教授）の研究室の協力により、タブレット端末とそこにインストールされた防災教育用アプリ「フィールドオン」を利用する。

エ　児童の感想より
・非常食について、レトルトやカップラーメンのイメージしかなかったけれど、袋調理という調理方法を知って、簡単で普段も練習できそうなのでぜひ家族にも紹介したい。
・水は飲むだけでなく、料理をしたり手を洗ったり、生活の中でたくさん使っていることをすごく感じた。水の確保は本当に大切だし、断水となると大変だと感じた。
・赤ちゃん、高齢者、障害のある方、ペットなど、避難所に「行けない」「行かない」という人もいることを知った。そのような人たちにも支援がいくか心配になった。
・蛭川と神田川から水があふれるなんて驚いた。川から水があふれてしまうだけではなく下水道や町の中の川から「内水氾濫」が起きることを知った。だから、水害がけっこう身近な災害だなと思った。
・アンケート調査をしてみたら、冬はやはり温かいものが食べたくなる意見がとても多かった。食べられれば何でもいいと思っていたけれど、被害にあって精神的にも落ち込むし、復旧作業を毎日しないといけない中なので、少しでも元気が出る食べ物を用意しておきたい。「食」って大事だなと思った。
・防災グッズ（物）の用意ばかりに意識がいっていたけれど、例えば家に一人でいたときに災害が起こることもあるので、事前に家族と話し合っておく準備も大切。

4　事業の成果及び今後の課題

災害が起きた時、本校の子どもたちが最も心配に思うことは、「一人だったらどうしよう」「衣食住に関して」だった。より実践的な防災学習を考えたとき、まずはこれまでの災害（今回は水害を主に）から得た教訓を学び、様々な角度からの「防災の引き出し」を準備しておくことで、万が一に備えることができるのではないかと考える。上記の学習を通して、地域における水害の理解を深めることができ、今できることは何なのかということについて考え始めることができた。命を守るために決断し行動する力を高めていくためにも、家庭や地域とともに学ぶ防災学習をこれからも継続して行っていきたい。

（文責　教諭　岸田　園）

寺尾小学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

長野市立寺尾小学校

1　はじめに

本校は、長野市松代地区内の千曲川沿い（更埴橋すぐ脇）にある。台風19号による水害の際には、学区内で浸水したところはなかった。また、１学年20名前後の単級で、全校120名の小規模な小学校である。

2　長野市立寺尾小学校の防災体制について（概要）

「学校危機管理マニュアル」「洪水時の避難確保計画」は作られているが、普段から職員の危機意識は高いとは言えず、避難訓練などは、前年度を踏襲する形のものが多い。

また、校舎が川に隣接しているものの、職員の水害への危機意識も高いとは言えず、地域にあった防災教育は十分行われていない。

3　学校防災アドバイザーの関わり

(1)　８月　学校防災アドバイザー（廣内先生、内山先生）と学校長、教頭、安全係による懇談会。

○学校アドバイザーの先生方

信州大学　教育学部　社会科学教育講座　教授　　廣内　大助　先生

特任助教　内山　琴絵　先生

○寺尾小学校　　林　　明美　校長

藤澤　勝彦　教頭

宮入　知代　（校内安全係）

窪田　美紀　（校外安全係）

○学校の避難マニュアル等の見直し、職員への周知

○千曲川の水難に対すること

→４年、防災教育（千曲川河川事務所）

全校や保護者や地域の人に向けて、水害に対する内容

○学校内の安全確保について

→避難訓練の見直し、引渡し訓練

(2) 11 月８日（金）　４学年参観日授業

社会「水害へのそなえとは」～マイタイムラインを作ろう～

〔事前学習〕　社会「自然災害からくらしを守る」の単元で、地震について学んできた。「ひろげる」の場面で、「風水害からくらしを守る」に入り、数年前に起こった台風 19 号による長野市内での水害について学んできている。４年生にとっては、小学校に入学する前の年で、避難をしたことを覚えている児童もいた。寺尾小が千曲川のすぐ近くにあることもあり、とても身近なこととしてとらえている。「猪の満水　災害デジタルアーカイブ」を利用して、どんな被害だったのかなどを調べた。

〔参加者〕　寺尾小４学年児童　24 名
４学年保護者　19 名

〔講師〕　千曲川河川事務所の方　４名

〔本時の流れ〕

①千曲川についての説明（資料、スライドによる）（15 分）

②マイタイムラインを親子で作ろう（「逃げキッド」による）（30 分）

・自分の家の状況を確認する（家族構成、ペット、避難場所など）。

・ハザードマップで自分の家の場所を確認する。
（浸水何ｍくらいの場所か）

・台風のニュースの時刻から行動の目安をマイタイムラインに入れていく（キットのシールをはっていく）。

③まとめ、あいさつ

〔次時〕まとめ、感想、
ふりかえり

(3) 12 月１日（金）校内安全点検研修

15：30～16:30

寺尾小学校内

〔講師〕学校防災アドバイザー　信州大学教育学部　特任助教
内山琴絵先生

〔内容〕寺尾小学校内の地震に対する備えについて
学校職員と一緒に、校内をまわっていただき、地震が起こった時にどういうことが想定されるかを、場所ごとに確認していった。特別教室での安全を確保できる場所を明示しておくこと、動いてしまう機器を固定しておくこと、落ちてきそうなものを取り除いておくこと、避難経路に物を置かないことなどを指摘していただいた。その後、できるものから安全器具などの設置を行い、その他のものについてはいつ実施するかの計画を立てている。

4　事業の成果及び今後の課題

・地域の方を巻き込んでの防災教育は、とても意義があった。
・避難訓練については、来年度の計画を立てる際に、回数、行う時期、内容について検討し位置づけておく必要がある（特別教室の場合や、放送が入らない場合など）。

5　まとめ

学校安全総合事業に参加することにより、専門的な方々に意見をいただいたり、授業をしていただいたりすることができた。校内職員だけではできないことをたくさん学ぶことができた。ただ、アドバイスをいただいたことを本年度中に実践しようと試みたが、新しい活動を学校教育計画に入れることは難しかった。来年度の計画を立てるところで、きちんと位置付けていくことが必要である。

（文責　安全係　教諭　窪田　美紀）

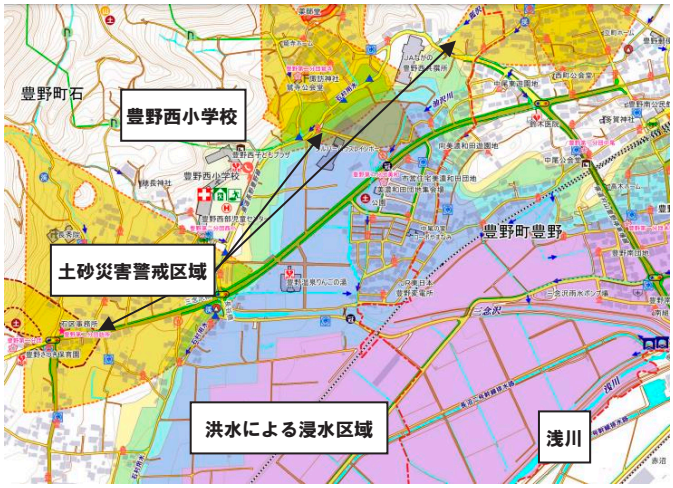
防災教育にかかわる学校安全総合支援事業の取組について

―防災学習支援用アプリ・デジタルアーカイブを利用した取組―

長野市立豊野西小学校

1　はじめに

本校は長野市北部に位置する全校児童 311 名の中規模校である。付近には千曲川・浅川が流れており、長野盆地西縁断層の動きにより形成された緩やかな豊野丘陵上に校舎が建っている。令和元年台風 19 号の際は、浅川流域の氾濫原にあたる学区内の地域が甚大な浸水被害を受け、本校の体育館をはじめとした避難所等で多くの被災者が避難生活を送った。



また「ゆたかの」と呼ばれる豊野は、鳥居川より引かれる石村用水が流れ、入川・隈取川・三念沢・権現沢をはじめとした多くの川や沢が流れる水の恩恵を受けている土地である。と同時に、学校周辺は土砂災害警戒区域にあたる箇所が多く、土石流や地滑りに対する備えも必要とされている地区でもある。

2　長野市立豊野西小学校の防災体制の取組

豊野地区三校（豊野中学校・豊野東小学校、本校）で連携しながら、学校防災アドバイザーである信州大学教育学部廣内大助先生・内山琴絵先生にご指導いただき防災教育の改善を図ってきた。児童が安全に気をつけて生活できる態度や、応急の場合にも迅速な判断をし、安全に行動したり避難したりできる態度を養うことを目指して、年３回の避難訓練や職員研修等の実践を重ねてきた。豊野三校教務主任会を中心にして検討・立案して行われた「豊野三校合同引渡し訓練」、共通教材を用いた「防災教育カリキュラム」による防災タイムラインの作成・見直しなどの実践を重ねてきている。

3　本年度の取組について

(1) 防災教育用アプリ「Field ON！」を用いた校内の危険箇所マップ作り 12月22日(金)

ア　ねらい

校内の危険箇所をグループで探して歩き、防災教育用アプリ「Field ON!」を活用して気づいたことを発表し合うことを通して校内の危険箇所マップを作り、防災への意識を高めることができる。

イ　参加者

５年１組　児童28名　教職員５名　市教委２名

信州大学教育学部特任助教　内山　琴絵　先生、ＩＣＴ支援員倉澤さん

信州大学学生３名、他校よりオンライン参加（情報交換会）２名

ウ　活動の概要

・５年１組は総合的な学習の時間に、豊野地区住民自治協議会の協力をいただき「豊野のいいところ」を巡りながら、水害に負けずに生きてきた先人たちの知恵について学んできた。

・南郷地区を歩きながら台風19号の水害発生時にどこで被害が起きたのか、どのように避難を行ったのか、実際に地域の方より話を聞き、一緒にフィールドワークを行う中で、地域における避難の課題・よさを発見することができる授業を計画した。

・信州大学教育学部廣内大助先生の協力により、タブレット端末と防災教育用アプリ「Field ON!」を利用する授業実践の様子を「長野市防災教育公開授業」として広く呼びかけた。

・あいにく当日は天候が悪かったため、フィールドワークの予定を変更して校内の危険箇所を観点別に探す学習活動をアプリの使い方の練習を兼ねて実施した。

写真①

写真②

写真③

「Field ON!」を使用し集まった画像データ

＜授業の流れ＞

・「安心安全・地震・大雨台風」の３つの観点から、校内の危険が予測される箇所に目を向け探すことを確認。　写真①

・校内の様子を撮影し、防災教育用アプリ「Field ON!」上のマップにコメントを入力し、データをアップする。写真②

・タブレット内にあるアプリ「ミライシード」を使い、データを入力し仲間に伝えるプレゼン資料を作成する　。写真③

・クラスの仲間にプレゼンを行い、全ての発表が終わった所で、「安心安全・地震・大雨台風」の３つの観点による危険箇所をランキング形式でまとめる。　写真④

エ　児童の様子

・危険箇所に着目して校内を歩くことで、見慣れた校内に様々な危険や、それを守る設備があることに気づくことができ、改めて様々な災害を想定して備えることの大切さを感じている様子が見られた。

写真④

オ　児童の感想

・自分たちが生活する学校の中に色々な危険な場所があることに気づいた。いつもは普通にくらしていた学校だったけど、これからはもし災害が起こったらどうするのか、よく考えて生活するようにしたい。

廊下に掲示された危険箇所マップ

(2)　「“猪の満水”災害デジタルアーカイブ」を用いた職員研修　10 月 18 日（水）

ア　ねらい

万が一再び本校が避難所になった場合に、学校職員はどのような備えをしたらよいのか、震災時避難所となった他校の例、避難所運営者、本校が避難所となった令和元年度に勤務していた学校職員、「“猪の満水”災害デジタルアーカイブ」より話を聞き、学校や職員が必要なことについて見つめ直す機会とする。

アーカイブを視聴

イ　参加者　教職員 18 名　その他１名

支援者　廣内大助先生　学校防災アドバイザー（信州大学）

内山琴絵先生　学校防災アドバイザー（信州大学）

小池啓道さん　豊野西小学校避難所長（当時）・現長野市企画政策部参事

ウ　活動の概要（講演）

(ｱ)　「熊本地震における避難所の実際　～何がおこり、学校はどう関わるのか～」

信州大学教育学部教授　廣内大助先生

・2016 年の熊本地震における避難所となった学校の事例について、当時の写真を交えながら紹介していただいた。廣内先生は「避難所運営は地域主体で学校は管理者としてサポートする」ことの大切さについて述べられたが、その分「地域と学校の交流を通じて、良い関係を築く」ことこそが前提となることを教えていただいた。

(ｲ)　「避難所運営　豊野西小の事例」

小池啓道さん　豊野西小学校避難所長（当時）・現長野市企画政策部参事

・避難所の初期からの様子を時間の経過（緊急期・応急期・再建期）と共に、どのような対応をしていったのか教えていただいた。特に、学校との連携で、学校施設に関してありがたかったこと、困ったことについて教えていただいたことは避難所運営の厳しさを別の角度から教えていただくきっかけとなった。

(ｳ) 「令和元年台風 19 号災害　学校職員の話～令和元年 10 月 13 日の動き～」
河西茂信教諭　豊野西小学校職員

・避難所となった体育館と、防災倉庫、電話、FAX、コピー機とが離れており、物資の運搬や情報共有に苦労したこと、職員室に寝泊まりしていたら夜中に突然避難者が相談に来たこと、児童のケアに心砕いたことなど、当時経験したからこそ語れる具体的なエピソードを職員で共有する機会となった。

・最後に、廣内先生が中心となって開設された「“猪の満水”（令和元年東日本台風）災害デジタルアーカイブ」が紹介され、当時の宮下校長のインタビュー動画を全員で視聴した。

エ　職員の感想

・熊本地震で避難所になると、生活の基本全て（飲料水・食料・電気・トイレ等）に困ること、避難エリアや物資、学校再開に向けての動きの難しさを知った。

・アーカイブは大変素晴らしい財産だと思った。当時何が起きたのかを知ることができて有意義な時間だった。ぜひ他の記録も見てみたい。

4　防災アドバイザーとの関わり（上記以外）

(1) 9 月 1 日（金）13:30～17:30 信州大学教育学部　内山琴絵先生
・豊野三校　安全防災教育の連携について
・参加者　学校職員 29 名　児童 292 名　保護者 234 名　市教委 1 名

(2) 9 月 13 日（水）10:20～11:30 信州大学教育学部　内山琴絵先生
・避難訓練（地震）について
・参加者　学校職員 29 名　児童 287 名

(3) 10 月 31 日（金）9:50～11:00 信州大学教育学部　内山琴絵先生
・避難訓練（地震・火災）について
・参加者　学校職員 28 名　児童 276 名

5　まとめ

令和元年の台風 19 号災害の経験から、豊野西小学校の防災体制や内容について信州大学の廣内大助先生・内山琴絵先生よりご指導をいただいてきた。今年度は実践を重ねてきた「豊野三校合同引渡し訓練」に加え、防災教育支援アプリ「Field ON!」を紹介していただき実践に繋ぐことができた。専門家の先生方のご指導をいただいたことに感謝し、今後も地域との連携を深めながら本校の防災体制をより充実したものにしていきたい。

（文責　教頭　酒井　啓喜）

学校安全総合支援事業の取組について

―合同引き渡し訓練とタイムラインの更新―

長野市立豊野東小学校

1　はじめに

本校は長野市北部に位置する全校児童 133 名の小規模校である。近隣には千曲川、鳥居川、浅川が流れており、令和元年 10 月の台風 19 号による千曲川の氾濫の際は、学区内で床上・床下浸水の被害を受けた家庭があった。本校体育館は避難所となり、多くの被災者が２ヶ月ほど避難生活を送ることとなった。

このような本校の立地からも防災教育の充実が必須であると考え、「学校防災アドバイザー活用事業」を中核とした教育課程の改善を図っている。豊野地区３校（豊野中学校、豊野西小学校、本校）の連携も重視して防災教育に取り組んでいる。

2　昨年度までの取組概要

学校防災アドバイザー（信州大学 本間喜子先生）のご指導を受け、子どもたちや職員の防災の知識・理解・技能の向上を図ってきた。具体的には、職員研修の実施と高学年児童一人ひとりの防災タイムラインの作成に取り組んだ。また、豊野地区３校や地域との連携についても、学校防災アドバイザーの助言のもとに地区住民自治協議会を交えて検討し、教務主任会で合同引渡し訓練を計画し、９月に実施した。

3　今年度の防災教育推進

防災･減災の意識を高め、必要な対応、行動を理解することをねらって防災教育を推進した。具体的には以下の３点について、学校防災アドバイザーの支援を得ながら進めた。

・ハザードマップや過去の災害時の状況を見て児童が自宅周辺の実情を知る。
・災害時の行動指針について学び、災害に備える意識を高めて具体的な方法を考える。
（タイムラインの作成と更新、避難所での生活を想定した熟議）
・豊野地区３校の合同引渡し訓練を計画、実施する。

(1) 前期の取組　　【参加人数：教職員６人、児童 133 人、外部講師２人】

水害や土砂災害についての知識を深める学習

８月 24 日～８月 31 日の期間に、全学年が生活科、総合的な学習の時間において防災教育の授業を行った。低学年は「防災って何だろう」というテーマで、地区のハザードマップを用いて台風や地震などの災害による危険性と、もしもの時にはどう行動す

べきかについて考えた。高学年は長野県防災ボランティア協会から講師をお迎えし（長野県赤牛先生派遣事業）、実際の災害の被害状況や避難の様子から、土砂災害やハザードマップの見方を学習した。

＜赤牛先生による防災教育の授業＞

(2) 豊野地区合同引渡し訓練

【参加人数：教職員 18 人、児童 133 人、
保護者 94 人（本校のみの人数）】

昨年度開始した豊野３校（豊野中学校、豊野西小学校、本校）合同の引渡し訓練を実施した。

初年度の反省から、今年度は３校に加え、地区の保育園２園（豊野さつき保育園、豊野ひがし保育園）を加えての実施とした。

児童を保護者に引き渡すまでの安全確保と指導を確認するため、登校した状態から保護者に引き渡すまで、兄弟関係で複数校へ迎えにいく場合を含めた一連の動きを検証した。事前に保護者へメール配信にて引渡し時刻を周知し、14:20 に訓練を開始。14:30 から保護者への引渡しを始め、15:55 に全家庭への引渡しが終了した。

＜教室にて保護者へ引き渡し＞

昨年度より６分早い完了となった。

(3) 後期の取組

ア　防災タイムラインの作成・更新

【参加人数：教職員３人、児童 71 人】

11 月８日～11 月 14 日に学校防災アドバイザーによる職員および高学年への授業を実施した。４年生は一人ひとりが防災タイムラインを新規作成するために災害についてのお話をお聞きした。５年生は災害時の危険度について具体的な例を学び、昨年度作成したタイムラインを更新した。

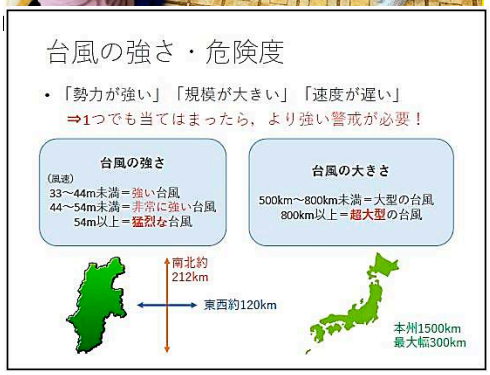
６年生は台風を想定した災害対策を考える学習で、台風３日前からの避難所での過ごし方をグループで意見交換した。

「一人暮らしの大学生なら…」

「高齢者の２人暮らしなら…」

「ペットを飼っている４人暮らしなら…」

などグループごとに設定が違い、避難者の



＜職員研修資料の一部＞

立場になって話し合いを進めた。

防災セットの準備や親族への連絡などの意見が出て、本間先生から「６年生らしい、良い考えがたくさん出てよかった」との言葉をいただいた。

イ　職員研修　　【参加人数：教職員 17 人、ＰＴＡ役員２名】

11 月８日、本校職員を対象に学校防災アドバイザーによる講演をいただいた。過去の災害の様子や安全対策、避難行動、タイムラインの必要性や情報収集の方法、防災教育に有効な教材などについて資料をもとにお話しいただいた。

4　学校防災アドバイザーの関わり

夏休み明け、学校防災アドバイザーである信州大学の本間喜子先生と連絡を取り合い、今年度の防災教育の推進について打ち合わせ、以下のことをお願いした。

・合同引渡し訓練への参加と事後指導
・児童のタイムライン作成に関わって、作成での留意点や更新時のポイントの指導
・職員研修の講師依頼

９月１日には、３校合同引渡し訓練に合わせて来校いただき、訓練開始前から終了後まで参観いただいた後、以下のような事後指導をいただいた。

・スムーズに引き渡しができていた。前回の経験が生きていると感じる。
・今年度から参加した保育園についても、混乱なく引渡しができていた。ただ、引渡しの開始時間が小学校と違っていたため、両方に迎えに行く保護者は調整が必要だったと思われる。
・学校外の駐車場も混乱なくできていたが、駐車場から国道を横断する際には注意が必要。
・二度目の実施で、基本的な引渡しの流れはできてきている。今後、想定を変えた引渡し訓練も考えていけるとよい。

11 月９日には４・５年生の、11 月 14 日には６年生の授業に参加いただき、災害時の行動やタイムライン作成のポイントについてお話いただいた。また、授業に先立って 11 月８日には職員研修の講師としてご指導いただき、職員の防災意識向上につながった。

5　事業の成果および今後の課題

(1) 成果

学校防災アドバイザー本間喜子先生のご指導を受けながら、子どもたち及び職員に防災についての知識・理解を深めることができた。今年度は６年生で、友だちと意見交換しながら防災について考え合う活動を取り入れていただき、より学習を広げ、深めることができたと感じている。今後も子どもたちが自分で防災タイムラインを作成、更新することで、実践力の育成につなげていきたい。

豊野地区３校間や地域との連携について、各校学校防災アドバイザーのご指導のもとに合同訓練を継続して実施できたのは大きな成果である。また、豊野西小学校における防災教育の公開授業では、現地参観こそできなかったものの、授業研究会にオンライ

ン参加することで、防災教育に活用できるアプリなどについて情報交換ができ、有益だった。

(2) 課題

多種多様な災害に対応するため、設定を変更した引渡し訓練の実施計画や、現在企画中の豊野３校における共通カリキュラム（小学校～中学校９年間の計画）の完成を視野に入れ、引き続き学校防災アドバイザーにご指導をいただきたい。

6　まとめ

令和元年の台風 19 号による災害を教訓とし、自校の防災体制や教育内容を再構築しようと、本支援事業で信州大学の本間喜子先生からご指導をいただいている。昨年度初めて実施した豊野地区３校による合同訓練を、反省点を踏まえた上で今年度継続できたのは、ご指導のおかげであると感じている。児童の命や生活を守るという最も大切な点について、専門家のご指導や地域との連携の必要性を強く感じる。本支援事業に感謝するとともに、今後も引き続き本校の防災体制を改善していきたい。

（文責　教頭　徳武　哲）

学校安全総合支援事業の取組について

― 保育園・小学校・中学校と地域の連携・協働ですすめる防災学習 ―

長野市立戸隠小学校

1　学校の概要

(1) 立地

長野市立戸隠小学校(東経 138 度 15 分 北緯 36 度 70 分 標高 910m)

(2) 世帯数と児童数

15 地区・世帯数 1,430（令和５年３月１日)、児童数 76 名

(3) その他

ア　ハザードマップ（長野市総務部危機管理防災課 H30 年３月発行）によると、多くの地区で土砂災害警戒区域、特別警戒区域がある。

イ　主要道路は、ほとんどが地滑りやがけ崩れの危険がある。

ウ　道路が狭く住宅地の道路では自動車同士がすれ違うのも困難である。

2　長野市立戸隠小学校の防災体制について

(1) 火災や地震に対する年間３回の避難訓練を行っている。また、冬期間は積雪で校庭への避難が困難であるため、避難場所を昇降口前に変更した避難訓練を実施、これにより、状況によって避難経路や避難場所が変更になることの確認も行っている。

(2) 戸隠地区には、保育園、小学校、中学校が一校園ずつあり、とがくし保育園は小学校と隣接している。保小中で連携し、災害時における引渡し訓練を毎年１回行っている。

3　学校防災アドバイザーの関わり

(1) 中学生と小学５・６年生が地区の方々と防災について考える地区懇談会の実施

戸隠中学校の生徒たちが、アドバイザーの榊原先生からの紹介を受けて防災教育用アプリ「フィールドオン」を活用する学習をした。このアプリは、生徒一人ひとりが自分たちの住む地区の危険個所等をタブレットで画像に撮り、それらのデータが同一マップ上に表示することができるアプリである。

中学生が学習してきた地区の危険箇所や防災のあり方について、地区の方を交えて意見交換をする地区懇談会を行い、本校の小学５・６年生も一緒に参加した。

懇談会では、戸隠地区の区長さんや保護者の方と一緒に、自分の住む地区ごとに分かれ、小グループで意見交換を行った。土砂災害が起きたという仮定の下、問題点や対策を中学生の視点から発表する場面では、地域の方が積極的に話し合いに関わり、一人暮らしの高齢者の住宅を示すなど、地区の方ならではの視点から防災意識を高め

る話し合いが見られた。小学生もいざというときは、高齢者の方の避難に携わることもあることから、自分事として話を聞いていた。

↑　地域の方と地区の防災マップを作成している様子

地区懇談会のまとめとして、アドバイザーの榊原先生から以下のようなお話があり、小中学生も地区の方も、真剣に聞く姿が見られた。

・戸隠地区は土砂災害が多い。公民館が避難所に指定されているところがあるが、公民館自体が土砂災害では危険箇所に入っている所もある。どんな災害のとき、どこに避難するとよいのか、自宅の方が安全なのかなどを検証していく必要がある。
・地区に住まう方全員が、避難場所までの避難訓練を歩いて行い、徒歩でどのくらい時間がかかるか知っておく。また、その避難ルートは安全か確認すると共に、夜間でも避難できるかを訓練しておきたい。
・1983 年(昭和 58 年) 9 月 27・28 日の大雨で土砂崩落が起こり、29 日は小中学校が一斉休校となった。また、1995 年(平成 7 年)の楠川氾濫、2023 年(令和 5 年)折橋土砂崩落なども起きている。雨によって危険にさらされることがある地区であることを改めて認識しておく。
・「ここは危ないかもしれない。理由は、〇〇だから」というフィールドワークの視点を日頃から意識していきたい。

(2) 学校防災アドバイザーを招いての引渡し訓練の実施

万が一の際に、保護者が、園児、児童、生徒をスムーズに迎えに来られるように、とがくし保育園、戸隠小学校、戸隠中学校合同で、引渡し訓練を年に一度実施している。学校近隣は道路が狭く、引渡し時に困難が予想されるため、保護者が迎えに来る移動経路を確認することも訓練のねらいとしている。今年度は、９月１日の防災の日に引渡し訓練を行い、学校防災アドバイザーの榊原先生に来ていただき、訓練の様子からご指導をいただいた。

↓　訓練の様子

小学校では、各教室で地震が発生したときの初期対応、校庭への避難訓練を行った。子どもたちは、避難時の合言葉「お・は・し・も」を守りながら、静かに校庭に避難することができた。その後、下校準備をして体育館へ移動し、保護者への引渡し訓練を行った。

引渡しの際は、保護者が中学校、小学校、保育園の順に自分の子どもを迎えに来るように順番を決めている。また、迎えに来る際に自動車で通るルートを指定している。そうすることで、狭い道路であるが対面通行をせずに、保護者が一方通行でスムーズに移動できる。このように、ルールを定めることで、滞りなく引渡しができた。

実施を終えて防災アドバイザーからの以下の３点が指摘された。

・児童の下校する手順は、予定通り円滑に進めることができた。災害という場面でなければ今回の方法でよい。

・実際の災害では、安全が確保されていない場合は引き渡さないのが原則。学校から家庭までの主たる幹線道路が安全であるかの情報を得た上で、引渡すのが望ましい。そのためには、支所や行政と連絡を取り合いながら、周辺の状況を把握できるようにしたい。

・土砂災害等で保護者が迎えに来られなかったり、道路が寸断されてしまったりして、帰宅が困難な児童がいた場合、学校が一時避難所になることから、その対応を具体化していきたい。

４　事業の成果及び今後の課題とまとめ

小学生が地区の方や中学生とともに、自分の住む地域の防災のあり方について考えたことは、避難場所や危険箇所を知り、自分も地区を守る一人であるという思いを育むことにつながった。

保小中が連携した引渡し訓練については、ルールを決めることでスムーズにでき、成果が出ていることがわかった。今後は、実際の災害時を想定し、支所などの行政と連携をして、情報を得られるようにしていきたい。そのためには、行政と一緒に訓練をする必要性や、具体的なタイムラインの作成が重要であることがわかり、今後の課題となった。

（文責　教頭　吉川　豪）

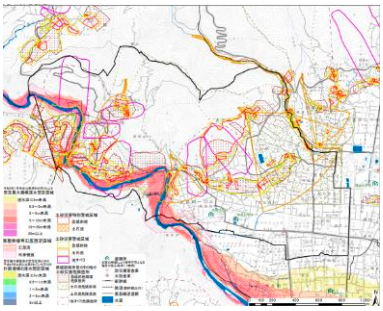
長野市立西部中学校における防災管理、防災教育の充実に向けた取組について

―　学校防災アドバイザー派遣・活用事業　―

長野市立西部中学校

1　はじめに

西部中学校は、長野駅周辺から西部市街地、さらに小田切・芋井地区を中心にした飯綱の山間地までの広範囲の学区をもつ学校である。学校の立地は、住宅密集地にあるが、学区が広いため、スクールバスを利用して登校する生徒もいる。また、西部地区の避難場所としての指定を受けており、大災害の発生時には地域住民が避難場所として利用すると同時に救護所としての役割も担っており、地域の方とのつながりや連携が必要不可欠とされている。



学区内の防災マップを見ると、土砂災害や洪水害等の危険区域ではないが、中学校区の多くの生徒の住宅が、土砂災害警戒区域に入っていたり、地滑り危険箇所に入っていたりしている。また、山間部寄りの地域や河川付近には「避難行動の確認レベル状態」の表示が多く見られ、降水量が増えると災害に遭う可能性が高い。

2　長野市立西部中学校の防災体制について（概要）

学級編成は、通常学級７クラス、特別支援学級、あさひ（知障）、りんどう（自情）、かたくり（難聴）の３クラスの全 11 学級、生徒数 209 名、職員 30 名で、市街地の中学校としては小規模校にあたる。

平成 21 年に竣工したりんどう体育館は、救護所として傷病者が参集することを想定して、多目的トイレ、シャワー室、エレベーターが設置され、その役割も担っている。

校内では、例年想定を変えながら年３回の避難訓練を実施しているが、平成 29 年度には、緊急地震速報受信システムを導入している。そのため、様々な時間帯で緊急地震速報を校内に流して訓練をすることが可能で、生徒が自ら状況を判断して避難行動をとる力を付けるためには有効な手立てとなっている。

また、過去には、近隣の方々との避難所設置訓練や隣接する保育園との合同防災訓練を実施してきたが、令和２年度からのコロナ禍は、地域と連携した防災訓練の実施は見合わせて来ていた。

3　学校防災アドバイザーの関わり

昨年度の避難訓練では、訓練終了後にそれぞれの状況にあった避難をどうすれば良かったか、自分の安全を守るためにはどうしたらよかったかということを職員と生徒が共に考える時間を確保して防災安全を自分事として捉えることができた。そこで、今年度は、より現実に近い状況での避難訓練を体験するために、地域と連携した防災訓練を計画し、学校防災アドバイザーの支援を受けることにした。

4　今年度の取組

【８月１日 信州大学教育学部教授　廣内大助　学校安全アドバイザーとの打ち合わせ】

次の点について学校として危機管理体制を整える必要があることの指導を受けた。

(1) 事前の危機管理

ア　防災管理体制の整備・・・非常時の物品（学校としての用意）

イ　点検と対策・・・マニュアルの整備

・普通教室　・特別教室　・体育館　・図書館　・廊下　での対策（安全対策）

・避難訓練の工夫（３年間を単位として避難訓練計画を引き継ぐ）、短時間避難訓練

(2) 発生時の危機管理・・・安全な避難場所の確保

(3) 事後の危機管理

ア　安否確認と対策本部の設置

イ　下校・引渡し

・一時避難完了後の対応（保護者連絡・安全な下校ルート・保護者連絡）

・引渡し（方法・保護者への周知）

・帰宅困難生徒対策（校内での対応）

・避難所開設（避難所との関わり、学校再開の準備、心のケア）

【９月１日　地域（加茂保育園、住民自治協議会）と連携した避難訓練】

〇地震後の火災を想定した避難訓練

＜ねらい＞

・教科担任の指示を受けて、授業会場から校庭に避難

・地震による停電を想定し、校庭からメガホンで避難指示

・防火扉を閉めて避難

・地域の方との合同訓練

＜地域の方の感想から＞

訓練後、学校長から「災害が起きたらどうするか」の問いかけに、子どもたちが主体的に話し合う様子を見て、参加した住民自治協議会会長は大変感心し、「災害時には中学生の力が必要」との講評をいただいた。

【11 月 7 日　地域合同の防災学習】

〇地震後の火災を想定した避難訓練

＜ねらい＞

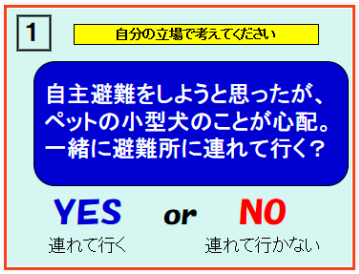
・休み時間中に、各自が安全な避難方法を判断して避難

＜信州大学教育学部教授　廣内大助　学校安全アドバイザーの講評から＞

・避難は、多くの生徒がしっかりとできていた。地震予知放送を聞き教室に戻ろうとしている生徒がいたが、一番近くの安全な場所へ避難することが大切。自分の避難を振り返り、一番安全な方法について考えるとともに、学校以外の場所での避難や避難後の行動についても考えて欲しい。

〇地域住民と２年生による地域合同防災学習

学校安全アドバイザーのアドバイスで、参加者が災害の状況をイメージしやすくするために自作の災害想定クロスロード（大雨により裾花川に氾濫の恐れがあるという想定）で、時系列（大雨洪水警報発令から避難後 1 週間まで）を作成し、学校職員がファシリテーターとなって実施した。



＜信州大学教育学部　教授　榊原　保志　学校安全アドバイザーの講評から＞

・避難が長期にわたる際どこに移動するのか、被災して家族がばらばらになったときのための家族での話し合いや、避難した住民を学校としてどのように支援するのかなどを生徒や先生が考えられるようになることが大切。西部中学校は、以前から地域と連携して防災訓練をしていた。このような取組を継続していってほしい。

5　事業の成果及び今後の課題

(1) 避難訓練について

・教室に残っている生徒を点検する職員の対応が、教室をのぞくだけの職員、声をかける職員、教室内をくまなく確認する職員のように、対応がバラバラであった。職員の対応をマニュアル化して、チェック項目を設ける。

・火災時の消火、行方不明生徒の捜索、負傷者の救助などの事故対応を、３年間で網羅できるように、ローテーションして実施する計画を立てる。

(2) クロスロードについて

・生徒は、早め早めに行動することの重要性に気づいていた。何を基準に行動をするのかについて学ぶ必要がある。ゲームを通して問題について時間をかけて議論するこ

とにより、適切な防災行動について考えを深めることができる。

・災害時に、どのように行動するかを、家族や親戚と相談しておく必要があることから、保護者と合同の防災学習を実施する。

(3) 生徒の主体的な防災の学び

・災害アーカイブを活用した調査活動を取り入れ、被災者から学ぶことで、当事者意識を高め一人ひとりの防災行動につなげたい。

6　まとめ

学校安全アドバイザーの方々から、自校の危機管理及び防災教育の今後の方向についてご示唆いただき、職員が、生徒や地域から学び、防災意識を高める機会となった。

（文責　教頭　坂戸　晴俊）

長野市立豊野中学校における防災教育の充実に向けた取組について

― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業 ―

長野市立豊野中学校

1　はじめに

長野市の北部に位置する豊野中学校は、創立 66 周年を迎えた生徒数 男子 134 名・女子 116 名、計 250 名の中学校である。豊野町は戸隠山麓を源とする鳥居川が町の東西を二分して流れ、飯縄山山中から流れ出る浅川が南部を縦断して千曲川に合流していく。郊外はりんごやぶどうの生産が盛んに行われている。豊かな自然に囲まれている豊野町だが、上記にある鳥居川・浅川・千曲川に囲まれているので、昔から水害とは切り離せない環境にある。４年前の令和元年 10 月の台風 19 号の水害で豊野町はもちろん、豊野中学校も大きな被害を受けた。水害に遭った家庭の生徒は安全な場所に避難しながらの通学を強いられた。豊野中学校は仮設校舎での日々を過ごしながら、令和３年に校舎改修を終了し、現在に至る。

2　長野市立豊野中学校の防災体制について

台風 19 号の被害後、当時勤務していた職員を中心にした自校の危機管理マニュアルの確認や、アップデートすべき部分について見直しを図った。その後、令和３年度から、豊野三校（豊野西小・豊野東小・豊野中）が連携した防災教育の充実を位置づけ、取り組み始めた。

令和３年度には、集中豪雨・土砂災害などに起因する洪水予測に際し、事前に保護者と確認した下校方法で下校させ、必要な生徒について迎えの保護者に引き渡すまでの安全確保と指導の一切を確認するねらいの基に初めての「引渡し訓練」を行った（準備として、タグとして首にかけられるような引渡しカードの作成・一次避難、二次避難の十分な説明など)。また、避難訓練だけで終わらないように、10 月の防災月間に合わせた学年毎の防災学習を行っている（現在も継続中)。この年の１月に信州大学の廣内先生に安全防災教育に関するアドバイスをいただいた。

令和４年度から豊野三校合同引渡し訓練を実施。安全、確実に引渡し者に渡すことを第一に行った。この年は廣内先生にも実際に訓練を見ていただきアドバイスをいただいた。「複数のお子さんをもつ家庭がどのような順番で学校に引き取りに来るのがより安全か」「確実を重んじたことによって生じた引渡し時間の超過」が課題に挙がった。

廣内先生には１月の避難訓練においても、地震に関しての講演をしていただき、生徒・教員の地震に対する知識や関心を高めていただいた。

３　今年度の引渡し訓練

昨年度の課題を受けて、９月１日に三校合同引渡し訓練を行った。「中学の引渡し時間が１時間を超えた」という保護者の意見を受けて、「確実に」はもちろん、「速さ」も重点に計画した。

(1) 準備

・校内タイムラインの見直し

・トリガーの見直しと三校での共有

(2) 工夫点

ア　校内入り口を別に

・迎えに来た保護者は避難誘導係が誘導・案内（３年：体育館１F／１・２年：昇降口）

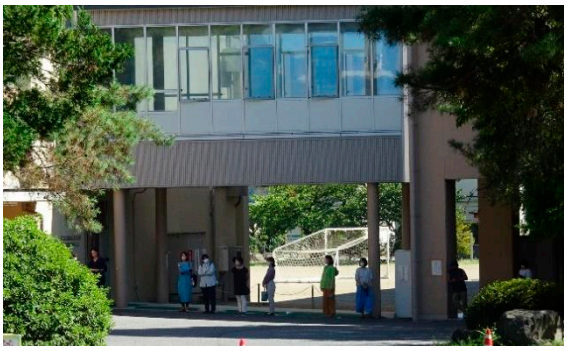
・保護者だけでも行動できるような案内板・コーンスタンド・順路などの工夫

イ　保護者が当該生徒の教室へ

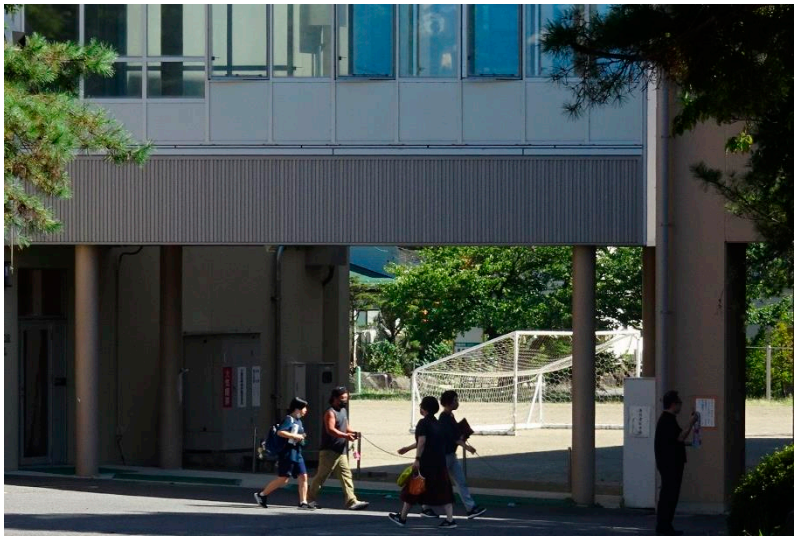
ウ　教室入り口で担当職員と当該生徒が本人（保護者の）確認し、引渡す。

（出入り口は３年保護者が体育館１F、他は昇降口）

エ　引き取り保護者が途切れた時点で引渡しチェック用紙と残存生徒を照合し、引渡し結果確認。



訓練開始の午後２時 30 分の 15 分前
一番早い保護者が並んだのはこの時間



引渡し中
混雑なし

4　学校防災アドバイザーの関わり

今回の三校合同引渡し訓練に対して受けたアドバイスは以下の通り。

県教委　　藤村先生からのご指導

・体育館の入り口の案内をわかりやすくすること。
・駐車場の案内は一方通行を考えた方か良いのではないか。
・引渡しカードの活用は、誰なら引き渡せるのか、誰に引渡したのかを確認できるものを準備すること。

市教委　　宮本先生からのご指導

・来年度に向けて少しずつ工夫して、よりリアルな訓練を。
・指示に従って動くことも大事だが、生徒と共有して動くことも大事ではないか。

信州大学　廣内教授からのご指導

・今回の訓練は 70 点＋α、昨年より良くなっている。
・参加する人がこの訓練で何をすべきなのかを共有することが大切。
・どれだけ短時間で、少人数でスムーズに省力化できるか。積極的に体制を縮小し、次に何ができるか考えることが大切。
・引渡しカード（チェックリスト）は、登録している人以外に引き渡さない、どれくらいの時間で帰宅できるかなどの工夫をし、誰に引き渡すのかをはっきりすること。
・保護者が迎えに来なかった生徒をどうやって保護者に引き渡すのかを考えておく。
・毎年の訓練の積み重ねによって、よりよい方向に修正していって欲しい。

5　事業の成果及び今後の目標

(1) 事業の成果

廣内先生からは、専門家のご意見を伺うことで、防災教育を見直す機会をいただいている。豊野地区三校の小中学校で、連携した保護者引渡し訓練を実施したが、豊野地区全体の防災教育という観点で廣内先生、内山先生にアドバイスいただき連携がより充実したと考えている。

(2) 今後の方向

廣内先生もおっしゃっていたが、どれだけ短時間に少人数で省力化した引渡しができるかを考えていきたい。今年行った訓練での反省を生かして、修正していこうと思う。

6　まとめ

本校の防災教育担当となり、命を守ることについての重責を感じる１年だった。専門的な知識や経験のない中で防災教育の計画を立てても、本当にこれでよいのかと不安になる中で、専門家の先生方がいて適切なアドバイスをいただけたことは、本当にありがたかった。今後も是非ご指導いただきたい。

（文責　防災教育係　教諭　花岡　精子）

学校安全総合支援事業の取組について

― 保育園・小学校・中学校と地域の連携・協働ですすめる防災学習 ―

長野市立戸隠中学校

1　学校の概要

(1) 立地

長野市立戸隠中学校(東経 138 度 15 分 北緯 36 度 41 分 標高 843m)

(2) 世帯数と生徒数

15 地区・世帯数 1,430（令和５年３月１日)、生徒数 46 名

(3) その他

・ハザードマップ（長野市総務部危機管理防災課 H30 年３月発行）では、多くの地区で土砂災害警戒区域、特別警戒区域がある。

・主要道路は、ほとんどが地滑りやがけ崩れの危険がある。

・道路が狭く、住宅地の道路では自動車同士がすれ違うのも困難である。

2　戸隠中学校の防災体制について

(1) 火災や地震に対する年間３回の避難訓練を行っている。また、冬期間は校内の敷地内に落雪の危険個所があるため、避難経路が変更になることの確認も行っている。

(2) 近隣の保育園や小学校と連携し、災害時における引渡し訓練を行っている。

3　学校防災アドバイザーの関わり

(1) どのような支援を受けたいと考えたか

近年、長雨による水害が多くなり、戸隠地区でも土砂災害が起きている現状があった。道路が寸断される規模の災害レベルではあったが、頻繁に起きていたこともあり、生徒も災害に関する危機感が薄れてしまわないように、火災も含め土砂災害についてじっくり考える場面を設定したいと考えていた。そこで、信州大学の榊原保志先生をアドバイザーに迎え、生徒だけではなく、地域で防災について考えていくにはどうすればよいか、中学校での取組について参観していただき問題点を洗い出していくようにした。

(2) 学校として取り組んだ内容

ア　「防災意識向上プロジェクト」における語り部の方の講演会

紀伊半島大水害から、防災への意識を地域社会で継続的に考え、発展させていることの大切さを自主防災会の取組を基に教えていただいた。過去の災害からタイムラインを作成し、避難が迅速に行われたことや災害後にもタイムラインの振り返りのワークショップを行ったことが紹介され、災害から得られた教訓を次に生かして

いく必要性を感じることができた。講演を聞いた生徒は、「中学生としてできることは何かを考えたい」、「自分たちの身の回りで災害が起きたらどうすればよいかわからない」という感想を持つことができた。特に、具体的にどうすればよいのか、自分事として捉え、講演で紹介された防災意識を持ち続けるための活動に強い関心を示していた。具体的には、自分たちにもできそうであるという理由から、防災をテーマにした運動会や日用品を使った防災グッズを作成する行事、過去にあった災害の被害を知ることのできる掲示等の取組などである。

↑　講演会の様子

イ　防災について考える地区懇談会の実施

中学生にできることをテーマに、アドバイザーの榊原先生からの紹介を受けて防災教育用アプリ「フィールドオン」を活用するようにした。このアプリは、生徒一人ひとりが自分たちの住む地区の危険個所等をタブレットで画像に撮ることで、それらのデータが同一マップ上に表示することができるものである。また、中学生の視点から作成される防災マップの作成に加えて、地域の方を交えて意見交換をする場面が必要であるというアドバイスも受け、防災に関する地区懇談会を行った。懇談会では、戸隠地区の区長さんや保護者の方を招き、地区ごとの小グループで意見交換を行った。土砂災害が起きた場合という仮定の下、問題点や対策を中学生の視点から発表する場面では、地域の方が積極的に話し合いに関わり、一人暮らしの高齢者の住宅を示すなど地区の方ならではの視点から防災意識を高める話し合いが見られた。

↑　地域の方と地区の防災マップを作成している様子

また、消火栓や消火ホース格納庫の位置を示す中で、標識が色あせていることを問題提起したり、空き家が崩れそうになっていることを指摘したりする生徒もいた。これらの意見から、地域の空き家の問題も中学生に考えてほしい、防災は助け合い

なので、戸隠に住む人が増えてほしいという地域の方の言葉もあった。「避難場所は知っているし、何も問題ないと思っていました。でもよく考えてみると、意外とどうすればいいのかわからないことがありました。災害はいつどこで起こるかわからないので、いろいろなパターンを考えておいた方がいいことがわかりました。家族といろいろなパターンを想定して話し合いをして災害に備えていきたいと思いました。」という感想を持つ生徒もいた。

↓　訓練の様子

ウ　防災アドバイザーを招いての引渡し訓練の実施

戸隠地域では、保育園・小学校・中学校が連携した引渡し訓練を行っている。兄弟姉妹が多く、学校近隣の道路が狭いため、保護者の移動の経路を確認することが必要だからである。また、地震を想定した訓練であることから、土砂災害によって保護者の迎えが来られない場合や考えられる問題点の分析も今回の訓練の目的とした。

実施を終えて防災アドバイザーからの指摘は以下の３点である。

・生徒の下校する手順は、予定通り円滑に進むことができた。災害という場面でなければ今回の方法でよい。
・災害状況により、引渡しの判断を学校で行うのは困難であり、行政との連携をしていきたい。
・帰宅が困難な生徒がいた場合、学校が一時避難所になることから、その対応を具体化していきたい。

4　事業の成果及び今後の課題とまとめ

地域と学校が連携・協働して防災について考えたことは、経験からの固定観念を持ってしまいがちな大人に防災意識を持たせるよい場面となった。また、土砂災害の危険と隣り合わせの地域であるがため、どの道路が寸断されるかで多様な場面が予想されることから防災無線や地区の防災体制についての認識を高めることもできた。学校の防災体制については、教育機関と行政との連携をした防災訓練の必要性や、具体的なタイムラインの作成が重要であることがわかり、今後の課題となった。特に、戸隠中学校は避難所になりうることがあることから、何がどこに保管されているか、足りないものはどのようにして補うか等の防災体制も確認する必要があることも課題である。

（文責　教諭　早津　雅寛）